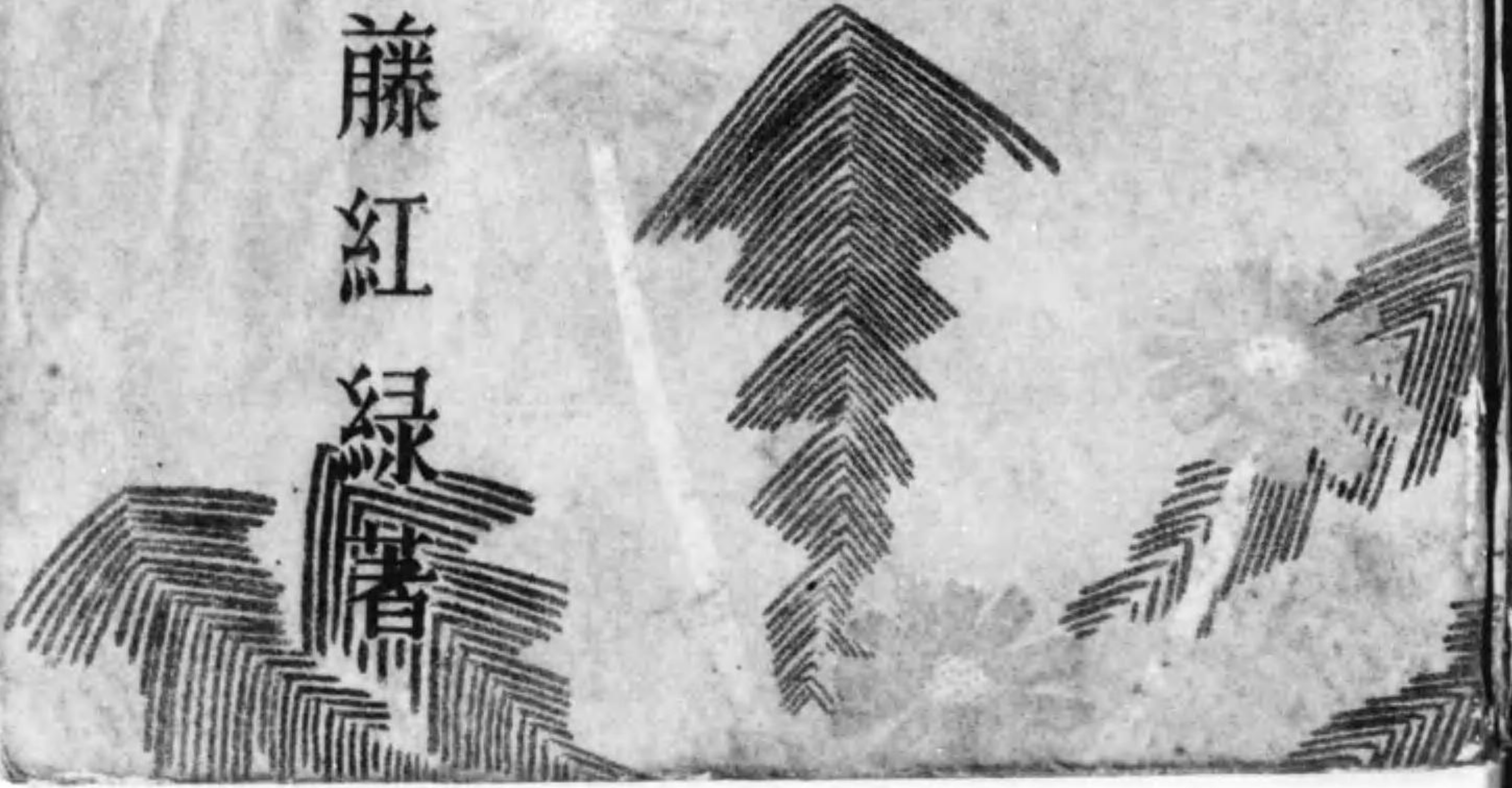


説
27

後編

鳩の家

佐藤紅緑著



始



362

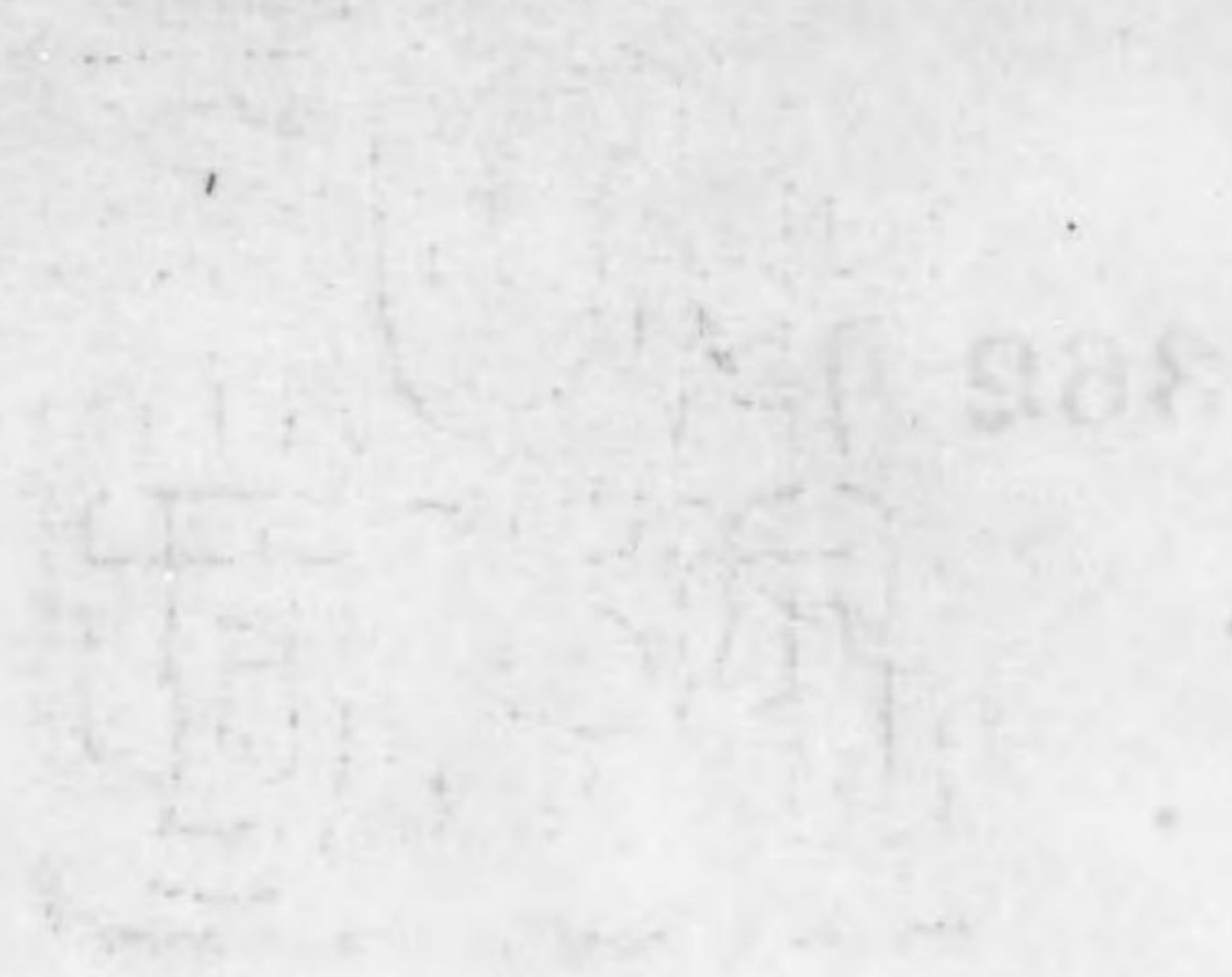
時 232
653



の

家

佐藤紅



鳩の家の下

佐藤紅緑

何處まで

一

一日は校友会の疲れ休み、其翌日篤子は學校へ行った。毎も約束して日比谷で秀子と待ち合はすのが例になつて居る。秀子は神田の猿樂町に住んで小さな店を出して居る靴屋の娘である。富貴子一派は彼女を皮剥くと呼で居る。

「お早かつたわね」と秀子は言葉を掛けた。

「いゝえ只た今よ」

二人は嫣然して並んで歩いた。雨催ひでもないのに秀子は鼠色になつた番傘を
持て居る。若しも降られると大變だからといふのは彼女の持論であつた。洋傘を
買う事が出来ないんだらうと篤子は氣の毒に思つた。

「私ねえ篤子さん」と彼女は靜に言た。「私學校をお止めにしやうかと思つてるの
よ」

「什麼して？」

「家の都合で」

篤子は其の事情を察した。幼さい時に虎公が學校を退がつた時に所謂家の都合
なるものを乳母に聞いた。

「家の都合は何ともなると父が言ふんですけれども私母がないでせうだから父
の世話を見なければ可愛さうですもの」

篤子は秀子の話が一夕身に泌む様に思つた。朝起きて飯を炊く、拭掃除をする、

夜は父の仕事も手傳ひ近所からの裁縫物を縫ひ、翌朝の御菜を買ひに出る、而し
て父を寢かしてから學校の温習をする。此那話を聞くと篤子は胸一ぱいになつて
返詞も出ぬ。而して友の顔を見詰めては眼を瞬たくのであるが、其中に篤子は一
種の頼母しさが湧いて來た、慙う世帯染みた話や、随分辛い苦勞をしてる人の一
家の祕密談を聞かされるといふ事は自分も其れだけ世の中の人となつたのだ、一
人前になつたのだといふ自信が出て來た。

「什麼して慙う皆なが幸福でないんでせう」と彼女は言た。「して學校を退がつて

什麼なさるの？」

「私養子をしやうと思ふのよ」

「養子つて何あに？」

秀子は顔を弗と赧らめた。「私一人だからお嫁に行かれないんですもの」
「ちやお婿さんを取るの」と言つて篤子は笑つた、笑つて直ぐ後悔した。眞面目な

話を愚弄かした様に思はれはしまひか。

「えい、爾よ、父が爾してくれといふもんだから」

「決まつたの？」

「えい……だけれども職人よ」

秀子は面伏さうに聲を低めた。

「職人だつて可いちやないの？」

「私も爾思ひますけれども、學校の人達に聞かれるとね」

「御父様が仰やるんでせう、其れちや何だつて可いちやないの？善いと思ふ事な

ら何でも爲るが可いと思ふわ」

「全く爾ね、善い事は何でもすると覺悟を決めると可いわね」

「私の讀だ一日と一生といふ本に書いてあるわ、今度貸してあげませう」

「えい、何卒ね」

二人は學校の門を入つた。控室の入口に五六人の姿が見える。

「来てよく」と一人が言ふ。

「聞えるぢやないの？靜になさいよ」

「早く――」

二人は別に氣にも留めなかつた。草履を穿いて控室兼教室に入ると其處に三十人許の生徒が関の聲を擧げた。

「何でせう」と篤子が言た。

「何かの悪戯でせう」

恚う言て二人は黒板の方を見ると、巧に畫いた女の姿！立てるは左の手に襦袢を取てる藝者一人、後に箱屋らしい男が提灯を持って居る。提灯には左の文字を記してある。

「南や小篤、箱屋秀吉」

「何あにやあれは」と篤子が言た時、再び喝采が響き渡つた。

二

「何でせう是れは、何でせう」と富喜子は知らぬ顔に一同に言た。

「藝者でせう」

「何といふ藝者？」

「南家小篤」

「有名なの？」

「見ずてんとかいふんでせう」

「箱屋も居るわね、提灯持て」

「何處へ行く處でせう」

「向ふに門が見えるでせう」

「あゝ○○學校と書いてあるわ、藝者が學校へ行くの？」

「ハイカラなのよ、音楽のお稽古に」

「あ、此の藝者は聲自慢なんですね」

「其れから器量自慢」

「何だか肺病らしいわね」

「箱屋も學校へ行くの？」

「これは違ひます、皮剥學校」

「ちや猫の皮を剥いで三味線にするんだわね」

「同わい〜言つては笑ひ、笑つては腹を抱へる様に悶を作つて立去らうとした。

「待て頂戴！」と秀子は富喜子の前に立塞がつた。

「何か御用なの？」

「えい、是は何方が晝いたの？」

「私知らないわ」

「貴女でせう」

「私知らないわ、ね 皆さん」

一同は秀子の權幕に鬼胎を抱ひて答へる者もなかつた。

「貴方です、貴方が晝いてるのを私見ました」

「私なもんですか」

「其れちや貴方の指は何で、白墨に汚れてる其の指は何したんです」

富喜子はびくりとして我指を見、慌て、其れを袂に引込めた。

「其那事を貴方に詰問される筈がありませんわ、縦令私にした處で此の晝は何

して其那に貴方の御氣に障るんでせう」

「何もお氣に障るよな事はないと思ひますわ。其れとも何かあるのでせうか、ね

い皆さん」と數の中の一人は坊主襟の太い首を縮めてべろりと舌を出す。

「是は私と南さんの事を晝いたんです」と秀子は最早涙ぐんで叫んだ。

「おや貴方と南さんの事なの？」

「爾です、確に爾です」

「お止しなさいね」と篤子は蒼白になつて言た。

「い、え私言ふだけ言ひます」秀子は毎もの沈黙に似ず、まくしかけて言ひ續ける。「貴方は何れだけの位があつて私達を馬鹿になさるんですか、其れや私は靴屋の娘です、人様の履物を扱つてる商賣です、馬の皮剥ぎでせう、穢多の子でせう、けれども何も私が卑しい者だからつて貴方方に御迷惑を掛けるといふんぢやなし、私だつて今まで自分から卑下して貴方方に狎れしくした事はないぢやありませんか、何の恨があるか知らないけれども木綿の着物を着てるからつて、番傘を持てるからつて二言目には皮剥だの穢多だの……」

此處まで言て彼女はもう興奮の極涙が喉に塞つたが又た續ける。

「其れも私だけなら辛抱が出来ますが、南さんは何貴方方に悪い事をしたでせう、

溫和しくて被居やるから馬鹿にして……い、え今日ばかりではありません、二年も三年も毎日の様に皆なで篤子さんを苛めるではありませんか、私は靴屋です、皮剥ですから何と言はれても仕様がありませんけれども、假りにも南さんを藝者だなんて、其れは何でせう、何だつて其那事を言ふんでせう」

「藝者だから藝者だといふのよ」

五六人の聲が同時に出了た。

「藝者ではありませんよ、立派な此の學校の生徒ですよ」

「藝者の子だといふのよ」と富喜子が突慥に言ふ。

「何ですつて？」と秀子は昂然と眼を擧げた。

「篤子さんは南家の御令嬢ですよ、何が藝者の子です」

「貴方は知らないのよ、私ちやんと知てるわ」と富喜子はせ、ら笑つた。

「貴方こそ知らないんです」

「貴方こそ……南さんは藝者の子ですよ」

「藝者の子ではありませんよ」

「秀子さん」と篤子は突然に叫んだ、其の顔は大理石の如く白い。「秀子さん、私は藝者の子ですわ、えい藝者の子ですわ」

「何を仰しやるの？」と秀子は吃驚した。

「いゝえ私は爾です、私は藝者の……私は藝者の……」

二言三言、段々聲が小さくなつたかと思ふと彼女の兩肩は波を打て、膝元が瘡の様に顛へ出した。

「南さん！」

秀子が呼ぶ間もなく篤子はぱたりと机の上に倒れる。

「あら大變だわ」と人々が騒いだ。

「藝者が瘡を起したのよ」と富喜子が言った。

三

係累を恐れて一人去り二人去り、終には一人の姿も見えなくなつた。

「南さん、確乎なさいよ、篤子さん」

秀子はおろ／＼聲で背中を擦りつ胸を撫でつ、水が欲しいにも手を放されない。

二人に同情するものも富喜子の前を憚つて手助けもせぬので彼女は篤子の身體を抱きしめて泣いた。

「どうしたのです」

事變を聞いて洋盃に水を入れて持て來た校長は眉を蹙めて二人を見下した。秀子は黙つて水を篤子の口に入れやうとしたが齒を喰ひしばつてるので水が入らない

「どうしたのです」と校長は再び訊いた。

「齒を喰ひしばつて被居やいます、餘程口惜しかつたのでせう」

「どうしたのです」三度び校長が訊く。秀子は黙つて黒板を指さした。而して校長には振向もせず篤子の青白い顔を抱き上げて、「くやしかつたでせうね」と涙をばら／＼と落した。が聽て「汚なくとも御免なさいね」憊う言て彼女は水を啣んで口移しに篤子の口に注ぎ入れた。顔の色は褪めても唇は憤怒に燃て居る、憤怒の唇と唇が觸れた時に秀子の頬に垂る、涙が篤子の頬にも垂れた。

篤子は微に眼を開いた。而して凝と秀子の顔を見詰めたが、美しい睫が靜かに涙の露を帯びて來た。

「氣が付いて？」

篤子は友の愛を感謝するものゝ如く微かに唇を動かした。

「先生！」と秀子は校長を見上げた。

「此の畫を御覽下さいましたか？」

「うむ、これは什麼も」と校長は八字髯を指先で摘む。

「南さんが憊うなつたのは此の畫のお蔭です」

「どうも不可ん事ですな」

「これは大村さんが畫いたのです」

「大村さん？爾か困りましたな」

「どうか相當の御處分を願ひます」

「處分と言て什麼も其のう……これはほんの悪戯だらう」

「よろしうございます、悪戯なれば何をしても宜しいと仰やるんですね一體黒板といふものは悪戯書をするために此處に立て、あるのをごさいますか、皮剝の娘や藝者の子を侮辱するために立て、あるのをごさいますか」

「まあ爾怒らんでも可い、何とか處分をするから」

「無論ですわ、退校をね」

「退校？大村さんを？」

「誰だつて構ひませんわ」

篤子は暫時校長夫人の室へ静臥させた、秀子は枕元を離れない、而して激しく富喜子の退校處分を迫つた。

「困つたなあ」と校長は夫人の假名子に相談した。「何とかせにやなるまい」

「爾ですな、併し野口に能く言ひきかしたら何とかなるでせう」

校長は篤子の病室へ足を運んだ。

「ねえ野口さん、大村の方は謝罪させる様にするから何とか穏便にな」

「不可せん」と秀子は言下に答へた。

「併し相手は大村博士の令嬢だから、學校から退學されたとあると結婚前でもあり、當人に疵が付くからね……」

「博士の令嬢だから大切で、皮剝や藝者の子は死ぬよな辛い思ひをさせられても可いと云ふ御規則でございますか」

「理窟を言ては困るよ、まあ能く考へて見て下さい」

校長は再び去つて假名子と協議した。

「馬鹿に怒つてるから始末に不可ない」

「什麼しても大村さんを退校さしてくれと言ふんですか」

「まあ爾だ」

「でも、大村さんを退校させると、他の生徒達も處分しないといふ譯には参りま
すまい、南と野口と二人の爲めに三十人餘りを退校させると」

「其りや大變だ、學校の死活に關する」

「あの二人だつて左まで利益になる生徒でも無いんですから不平を言ふなら言は
して置く方がねえ貴方」

「其れはいかにも爾だ」

二人の相談は一決した。

篤子は昏々として眠つた。秀子は何時まで枕元を去らなかつた。生徒達は心配さうに折々室の様子を覗きに來た。何を思つたか富喜子は一時間だけで家へ歸つた。

篤子の眼の覺めたのは一時頃であつた。彼女は卒倒してから何事も知らなかつた。秀子の話を聞て我れながら人々を騒がした事を恥かしいと思つた。

「今ま幾時でせうか」

「もう一時過ぎよ」

「済みませぬね」と篤子は起直つた。今日は土曜である。生徒は既に去つて廣い校舎が寂莫と古寺の如く淋しい。

「貴方お腹が空いたでせうね」

「いゝえ其那でもないわよ」

「土曜でないとお辨當があるんだけれどもね」

「私よりも貴方が牛乳か何か飲まないと不可いわ」

「さあ歸りませう」と篤子は立上つた。足がふらくして頭が物に壓へ付けられた様。

「危ないわよ、晩まで静として被居やい」

「いゝえ爾して居られないのよ、家で心配するから」

「大丈夫、先刻校長さんがお宅へ電話を掛けたから」

「えつ？家へ知らしたの？」

篤子はひやりとして秀子の肩に捉まりながら足を踏みしめた。學校で卒倒して皆の厄介になつたと云ふ事が知れたら伯母さんに何と言て叱られるだらう。篤子は途方に暮れた、彼女は自分の病氣よりも先づ第一に伯母さんの不機嫌な顔を思

ひ浮べた。

「お宅からお迎が来さうなものですね」

「いゝえ、来やしますまい」

「どうして？」と秀子は眼を圓くする、南家ともあらう家が、車位は寄越しさうなものだ。

「家では少し忙しいから」

篤子は我が家の恥を庇ひたさに何気なく慫う言つたものゝ、心の中では「若し乳母の家だつたら」といふ考が矢の如く閃めいた、而して身體の悪い時にも氣兼ねせず寝る事の出来る様な家が欲しいとも思つた。「慫那事を思つては伯母さんに濟まない」慫う思ひ返した時彼女は微かに耳根を染めた。約その事情は秀子も人の噂に聞いて知て居る。

「貴方も苦勞の多い方ね」

篤子は黙つて俯向いた。秀子は其腕を取て靜かに室を出た。

車にも乗らず、電車は頭に悪い。二人は歩く事に決めた。大丈夫だと口には言ふものゝ、烈しき昂奮から卒倒した後の疲勞は思ひの外であつた。「濟みません濟みません」と篤子は口癖に言ふ。空腹ではある、其れに並足よりも緩い足取は却て疲れが酷いものである。秀子は什麼かして篤子に元氣を添けやうと思つた。平素に口の重い彼女は快活な話をする事は出来なかつた、而して反對に言ふまいとしても、進り出るのは學校に對する憤怒の言葉である。

愛宕下から築地まで。——二人は疲れ切つて漸々家へ着いた。お時の室へ行たがお時の姿が見えない、廊下を通つて環の室の前を過ぎる時、其處にお時の聲がした。

「只今！」と彼女は襖を明けて挨拶した。お時は黙つて居る。

「あら！歸つたの？」言た聲は富喜子であつた。「私御見舞に來たのよ」

篤子は閃と顔を見て嫣然した。「難有う」

彼女は最早怨を忘れて了つた。

「お友達かい」とお時は咎める様に言て秀子の姿をちろ／＼見やつた。

「えい、種々御世話になりましたの」

お時は横を向いた。「學校で卒倒へるなんて好い心掛ですね……併し難有うよ」と秀子に一寸眼を運ぶ。

篤子は驚く秀子を伴れて自分の居室へ入つた。

「恐い伯母さんね」と秀子が言ふ。

「御氣に障つたら御免なさいね、惡氣がないんですけれども彼様いふ人なのよ」

「貴方が御可愛さうね」と秀子は染み／＼言て次に憎らしげに「大村さんが來てゐるのね憎らしいわ」

「見舞に來てくれたから勘忍してあげませうよ」

「貴方はお人好ねえ本當に」と秀子は唇を噛むた。

二人の去た後でお時は富喜子に訊ねた。

「今來たあの子は何ですの？」

「あれが野口秀子といふのよ」

「あゝあれが爾なの？ 穢多の娘？」と環が言ふ。

「えい爾よ」

「あゝ汚ない」とお時は胸惡さうに顔を皺めた。

「爾と知たら口を利くんぢやなかつた」

「何だつて其那ものを連れて來たんだらう」

「仲が好いんですよ」と富喜子。

「穢多と藝者！」と環が笑ふ。

「仍且眼の寄る處が玉だね」とお時は美しくお飾をした環と富喜子を等分に見廻

した。

離室の幽霊座敷には秀子が勝手に戸棚を開けて床を敷いてやり、厭がる篤子を寝かし付けて、風通しの好い様に椽の障子を明け、扱て残り惜さうに別れを告げた。

「もう歸るの？」

「えい」

「もう少しね」

秀子は又もや座り直した。病氣で歸つたものを誰一人世話を焼くものもない、あの様子では噂に聞いたよりも恐い伯母さんだ、其れに富喜子も来て居る、自分が歸つたら篤子さんが什麼に心細からう。

「私其ちやもう少しね」

篤子は嫣然して。「難有う、併し貴方はお腹が御空きでせうね」

「何ともないわよ、其れよりも面白いお話の方が可いわ」

お腹が空いたらうと思ひながらも篤子はお時の許可なくして食物を取寄せる事が出来ない。氣の毒と思ひつゝも此儘別れるのも厭である。爾思つてる篤子の氣を察して秀子は故意と種々な話を仕掛けた。

篤子は「一日と一生」といふ例の日記體の本を出して二人で讀だ。

「貴賤貧富の差別あれども、开は人間の價値をいふのではない。華族でも乞食よりも卑しい人がある、乞食でも華族より貴い者もある。貴と賤とは人格に依て區別すべきものである、然らば何が一番賤しむべき事かといふに嘘を吐く事である。他人に嘘を吐くものは自分の良心をも欺く事になる。つまり自分を疎末にするのだ、自分を疎末にするのは自ら賤しいといふ事を證明してるのだ」

「全く金言だわねえ」と秀子は感歎した。

「もつと讀で御覽なさい」

「自分の兄弟の中に盗を働く者があつたら其人は必ず恥かしいと思ふだらう、其れと共に自分の近所に悪い人があつても恥かしいと思ふだらう、神田區に住む人は神田に悪人があるのを恥づる。東京に住む人は東京に悪人があるのを恥づる。これを大きくすると、外國にある日本人が外國で悪事を働いたと聞けば内地の日本人も氣持が好くない。子供の時には自分の學校の生徒が不良少年の群に入たと聞ても世間へ顔出しが出来ぬ程體裁が悪いものである。其れは何だか理由であるか」

秀子は吻と呼吸を吐いた。二人の顔は段々に熱して來る。而して廂を指先で拂ひのけて二人は頭と頭を寄せた。

「其れは責任である。人間は皆な持ちつ持れつのもので決して一人で生きて行けない、四千萬人の中に一人でも悪い事を働く人があると三千九百九十九万人の恥辱であると思はねばならぬ」

「爾だわねえ篤子さん」

「本當に好い本でせう」

「一人が悪い事をすれば全國民の責任である、其れと同時に吾々は其の罪を負はねばならぬ、親の罪を子が負ふ如く、兄の罪を弟が負ふが如く……」

篤子はくすくす歎息あげた。

「どうしたの？ 篤子さん」

「私はねえ、私は大變に罪があるわ」

「どうして？」

「私の母が藝者だつたんですもの、どんなにか悪い事をしたでせう、富喜子さんに苛められても仕方がないわね」

「爾言へば私だつて、商賣が商賣ですから」

二人は暗然として黙つた、篤子は涙を拭いて立直つた。而して帯を締めて「秀

子さん一寸待て、頂戴ね」

「え、だけれども私もう御暇するわ」

「待て居なくちや厭よ」

狎へる様な聲で言捨て篤子は廊下へ出た、實は自分も餓じくなつた、其れよりも秀子さんが什麼なに餓じからう。今までお友達を家へ招んで一膳の飯をも御馳走した事は無いが、時計は既に三時を過ぎて居る、什麼かして伯母さんに願つて見やう、彼女は慙う思ひ決めた。

環の室には賑かな笑聲が漲つた。

其處には環、お時、富喜子、琢磨其れへ庭の植木を刈込んで居た總五郎までが

呼込まれて迷惑さうに椽に腰を掛けて居る。

「早く其のう何とかいふ歌を聞かして貰ひてえもんだな」

琢磨は少し謙遜な様な態度をして膝の上に原稿を置いて人々を見廻した。元來

彼は中學校を出てから最早や三年、高等學校の試験を失敗つてから腦が悪いといつて學校へも行かず、毎日ぶら／＼遊んで小説に耽耽つたり、芝居を見廻つたり、爾かと思ふと畫家になるんだと言てカンバスを提げて寫生に行くと言ては旅行に出掛けたり、劇壇改革の爲めに俳優になると言ては猥りに尖がつた帽子や赤い上着を着た若者を集めて大きな聲で臺詞を稽古したりしたが、何れも／＼途中で厭になつて近頃は小説や詩の創作に腐心して居る。彼が彫刻に凝た時には室中はゴツホやロダンの寫真や額で埋まつて木屑石屑泥屑が足の入れ様もなく／＼して居たが、扱て其れが厭になり出すと、一朝の中に奇麗に掃除して其代りに沙翁、イブセン、メーテルリンクなどの額や石膏像が飾られ、自分も軟帽を前のめりに被り赤い襟飾を氣にしながら歩く。其の代り目の早い事暗轉よりも早い。彼は思ひ直すのが早いと共に、道具寄が更らに早い。彼は畫家にならうと思ふと其日の中に洋畫の繪具の極めて高價なのや美術學校の制服の様なものまで買ひ調へ

る。彼者にならうとした時に八十圓の鏡臺を買つて環を驚かしたが、其れは今ま環の化粧室に下げ渡しとなつた。

彼は今ま頭の毛を延ばして真中から兩耳に垂れる様に分け、自ら露國の百姓式だと言てる太い帯革の付いた被布折衷の裾の廣い外套様のものを着て居る。彼は自作の小説を朗讀し終つた、毎もなら環にお時、其れと御馳走を目當に集まる同好の文學者、否藝術家共四五人といふ顔觸れだが、今日は富喜子歡待の爲め是非にといふお時の所望であつた、

小説は「寒い女」といふ題で、或夜佃島の邊を歩いて居ると交番に拘引されて居た女がある、其れは淫賣婦で甚く氣の毒に思つたから其後方々尋ねて廻り合つた上、淺からぬ契とまで進行した、其時女は帯の間から五錢の白銅を一つ落して慌て、拾つた。其れを見て男は厭になつた、而して其夜別な女の許へ行た。恚ういふのである。

「新しいわね」と環がいふ。

「自己告白でなければ、此那に描寫が行届きやしないわね。別な女の處へ行たといふ終が實に可いわ」と富喜子が言ふ。お時は煙に巻かれた體で只だ環と富喜子が賞める度にお時「まあ」とか「ほんとに」とか曖昧な感投詞を發した。而して富喜子が琢磨の顔を惚れくと見詰めてるのを見て「琢磨は本當に好男子だ今に此の二人が夫婦になつたら」などと胸算用をしてゐた。

「つまらねえ」と總五郎は欠伸した。

「其れが小説てえものか」

「爾です」と琢磨は應揚に答へた。

「淫賣を買つたり、他の女を買つたり……ふうむ、其那汚ねえ事を書くなんてお前……」

「汚なくはありません、人間の自然性です」

「だけれどもお前、八犬傳でも國定忠治でも其那汚ねえ……」

「御祖父さんにや解りませんよ」

「だつて汚ねえや」

「汚ないたつて御祖父さんも汚ない事をするぢやありませんか」
「なる程、ふうむ」總五郎は首を縮めて「此奴あ一本参つたな」

一同わつと笑つた。

「詩の方を伺ひたいわ」と富喜子が言ふ。琢磨は次の原稿を取上げた。

「題は……夜の底といふんです」

「新しいわ」

「奇抜だわ」と二人が言ふ。琢磨は読み始める。

「赤い〜蝶々が飛んで来る」

「そんな蝶があるかね」と總五郎が言ふ。

「黙つて被居やい」と環。

「なる程」

「春の夜の闇の底が擦つたい」

「はてな？誰が何を擦ぐるんだい、女中でも抑捺つてるんかね」

「黙つて下さい」と今度は琢磨が言ふ。

「なる程」

「瓦斯まんごとの咽び泣き」

「ホヤらんぶの破片がございてんだね、女中を擦ぐるもんだから毀して了つたんだね、氣を付ける事だ」

「もう止めだ」と琢磨はぶり〜して原稿を疊へ抛り付けた。其處へ篤子の姿が見えた。

「あの、伯母さん」

「何です」

「一寸お顔を……」

「何んだか知らないが其處で御言ひな」

篤子は言憎さうにもぢくして。

「あの……御飯を……」

「おやお前は病人の癖に御飯を急ぐのかい」

「あのう……未だ御晝飯を戴きませんから」

「其那事はお勝に言ふが可いちやないの？ お前に御飯を食べるなと私が言ひまし

たか」

「いゝえ、あの私ではありません」

「誰のです、まさか黒犬の飯を私に出せといふんぢやなからうね」

「はい、お友達の……彼處に来て彼居やる野口さんのを……」

「えつ、あの人に御膳を出してくれといふのかい」

「えい、私の病氣で御宅へ歸らずに此處まで送つて下すつたもんですから」

「おう厭な事だ」とお時は故意と身慄した。「穢多に御膳を出すなんて、其那人に口を付けられたお茶碗や何かは何ぞ積する積なの？」

「何か食べるつてお錢をやるが可いわ」と環が言ふ。

「其那事を言ふなよ」と總五郎が言ふ。「穢多だつて何だつて可いちやねえか、えいお時、俺だつて先祖は何處の馬の骨だか知れやしねえせ、篤子が厄介になつたんだ、御馳走位はしてやらなけりや」

「其れぢや此の御鮮でも持て行くが可い、汚ないからお皿だけは置いて行ておくれよ」

篤子はびり、と眉を昂げたが、喉が塞つて言葉も出なかつた。餘りに情ない伯母の處置に彼女は只だ赫として眩暈を感じたまゝ室を出た。廊下は夢の様。自分

の室へ入ると秀子の姿は見えない。と見ると巻紙の片端に走り書。

「篤子さん、私は他家様では食ものを戴けない身分ですから、これで失禮します
お互に親の代りに善行を積みませう、左様なら」

篤子は蒲團に包まつて聲を立て、泣いた。

七

篤子は其儘動く事が出来なかつた。彼女は願願の邊から後頭部が痙攣れる様に痛んだ。而して胸が重石を以て壓へ付けられた様、「大變な病氣にでもなるのぢやないかしら」恚う思つて水が飲みたさに床を出やうとしたが最早身體が縛られた様に伸び上る事さへ出来ぬ。其中に全身が烈しく慄へ出した。背中から水を浴びせられた様に悪寒がする。彼女は人を呼ぶ力もなく、がた／＼慄へながら確乎と夜具を捉まへて居た。と半時間と経たぬ中に燃ゆる様な熱が起つて來た。其後の事は知らない。

家中が夕飯を済ましても篤子は起きなかつた。「何處かお悪いのでせうか」と女中のお勝が言ふ。

「氣に食はない事があつたもんだからふて寝をしてるんだよ」とお時が言た。

其の夜仙七は店から晩く歸つた、彼は例の如く篤子の室の前を注意深く通り過ぎた。「お嬢さま只今」憊う言たが返辭がない、耳を欬てると微に苦痛の呻吟が聞える。仙七は矢庭に室へ飛込んだ。

「大變だ〜篤子様は……」

此の聲に驚いて人々は集まつた。一番に驅けて來たのは力であつた。

「什麼したんでせう」と仙七はおろ〜聲で言ふ。

「大變な熱だね」と力は篤子の額に手を當て、人々に前後の様子を聞た。誰も答

ふるものがない。

「此邪病氣になるまで抛て置くなんて實に酷い」と力が呟く様にいふ。

「お可愛さうに誰も氣を付けてくれないんだ」と仙七は口を滑らしたがお時の顔色を見て縮み上がった。

「知らないものは仕方がありません、此子の番人ぢやあるまいし」

「好で病氣になつたんだから仕方がないわ」と環がいふ。

「好で病氣になる人があるものか」と琢磨が言ふ。

「食べ過でせうよ」とお時が言ふ。

「いゝえ違ひます」と力は考思深さうに胸の邊りに耳を付けて心臓や肺を聞き澄ました。

「什麼か醫者を呼びやつて下さい」

「貴方が來年醫學士になるんだから癒して上げて下さいよ」

「篤子さんの病氣には御醫者さんよりも力さんの療治が一番利くでせうよ」と環が言ふ。力は其れには答へず首を傾げて居る。

「醫者に見せて下さい」と彼は再び言た。

「其那に大騒ぎをする程の病氣なの？」

「伯母さん」と力は膝を正して向き直つた。「此の熱を御覽なさい、三十九度を越

して居ます、僕は肋膜炎でないかと思ひます、苦しむ者を呼ぶのが不可いなら僕は僕の手で癒して見せます。けれども其れを爲るには一應貴方方に御断りして置かなければなりません、僕は醫者の職務を行ふのですから篤子の身體に觸る事もあり裸體にする事もあります、其の度毎に今言た環さんの様な不謹慎な言葉を聞かされると困ります」

「道理だ」と總五郎が立てる人々の背後から首を出した。「什麼ともお前の好きな様にするさ、環さんが口を出す處でない、什麼もお前は嫉妬家で困るよ」

環はふいと室を出た、出合頭に醫者が入つて來た。實は仙七が獨斷で電話を掛けたのである。

八

醫者に對してはお時も前後の事情を語らない譯には可かなかつた。學校で面白い事があつて卒倒した事、歸つてから何も食へなかつた事などを手短かに言つて終りに「此の子は我儘だから騒ぎが少し大き過ぎるんです」と言つた。

「インフルエンザです」と醫者が言つた。「學校で急激に昂奮して疲れた處へ以て來て風邪を引いたんでせうお歸途の時には寒氣がすると仰やつてゐたか」

「いゝえ歩いて歸つた程ですから」

「歩いて？」と力は訊返した。「卒倒した後には車にも乗らずに愛宕下から築地まで……」

「自働車でも迎にやると可いんでしたね」

「環だつたら什麼するんだ」と總五郎は小聲にお時に囁やいてくすりと笑つた。

醫者の歸つた後で枕元で總五郎とお時の議論が初まつた。總五郎は今晚だけでも力に看護して貰へと言ふ。お時は力に明日の學校があるから睡眠不足では可いぬ、女中のお勝でも添けて置かうといふ。「私が添いて居ます」と仙七が言ふ。「お前は前日の事があるから篤子には添けられない」と言はれて仙七は眞赤になつて引込む。

此の議論の最中に「僕も添いて居やう」と琢磨が言た。

「環も添けます」とお時が言ふ。

「什麼でも可いや」と總五郎は室を出た。彼は今夜例の藝者共を連れて鎌倉へ行く約束があるので、慌て、帽子を取り上げた。が奥の方で氷を砕く音が聞えたので彼は一寸躊躇した。「俺が居なかつたらお時の奴意地悪をするだらう、平素とは異つて病氣の時だけは見てやらなけりやなるまい」

彼は自分の居室の眞中に立往生して考へた。「俺を待てるだらう藝者共が」併し

篤子。可愛さうだ」

藝者共の美しい顔や光つた髪がごちやくと一團になつて見える。「旦那随分だわねえ」と八方から浴びせかくる媚めかしい聲も聞える。と其中の一人が何時の間にか孫娘の顔になつて今一人がお時の顔、環の顔になる。

彼は帽子を床の間へ抛り出して帯に巻いた時計を脱した。

「仍且孫の方が可愛い」

彼はゆつたりと微笑した。元來彼は篤子に對して左迄の愛情を持って居なかつたのである、がお時を厭がらせるには什麼しても篤子を看板にする事が必要である世間體ばかりを氣にするお時は、篤子を虐待するなど、噂される事を酷く恐れて居る。其れに付け込んで總五郎は何時も皮肉を言ふ。次には環と篤子の比較で、お時は什麼しても環を篤子よりずっと好い子にしようと企む、其裏を缺いて總五郎は環の缺點ばかりを言ひ立てる。而してお時の厭がる顔を見て獨りほく／＼喜

んで居る。憊ういふ關係からして何時の間にか總五郎は篤子の味方となつた。而して彼の愛情が一步づ、深くなつて行た。

彼は篤子の室へ行た時に、お時親子三人がすらりと頭を並べて林檎を食ひながら力が篤子の頭と胸の氷嚢を交るゝ手で抑へてゐるのを睨めて居た。

「どうだね、些とは好いか」と總五郎が言ふ。

「餘程熱が退きました、今ま眠つて居ます」

「好い鹽梅だ」と總五郎はお時等三人を見廻して「お前達は病人を看護に來てるのか但は看護人の監督に來てるのか」

「何ですつて？」

「まあ好い、手ん手に目つぱりこで面白い看病人もあつたものさね」

ハ、ハ、と笑つて總五郎は室を出た。

九

夜が段々更けて來た。篤子の熱は容易に冷めない。力は自分の手が氷嚢に痺れるので折々右に左に取換へた。琢磨とお時と環は出たかと思ふと入つて來る。入ると頭を突合はせて果物や菓子をかゝり、音させて食べて居たが腹が膨れると共にお時はこくり／＼居眠を初めた。「母様お寝みなさいよ」と環が言ふと「いゝえ眠くはありません」と頑張る。到頭琢磨に言ひ伏せられて室を出たのは十二時頃であつた。

「氣をお付けよ環さん」憊う言て彼女は力の方を腮でしやくつた。

お時の去た後は更らに淋しかった。環は頻りに力に言葉を掛けたが力は返辭もしない。

「静にして下さい」と彼は言た。

「貴方は何時まで其處に添いて被居やるの？」

「熱の退くまでは手が放せません」

「徹夜？」

「爾です」

「親切で被居やる事ね」

環は黙つて室を出た、暫時琢磨は續けさまに欠伸をして居たが、こそくと室を出た。眩しからぬ様に青い巾を掛けた電氣の覺束ない光が篤子の青褪めた顔と力の淺黒い顔とを照らした。醫者が來た時に抱き上げて解いてやつためりんの帯が力の膝に宛つて居る。力は其れを片付けて押入に入れた。髮針や鬚櫛等は机に上げた。而して漆の様な黒い房々とした髪を枕から疊へ翻して頭の地肌へ浸み込む様に氷嚢を彼方此方へと抑へる様に廻した。折り／＼總五郎はのそり／＼とやつて來る。

「工合は什麼だい」と襖から顔を出す。

「大分好きささうです」と言ふと。「可かつた／＼どうか宜しく頼むよ」と言て引込む。

仙七は何時まで寝なかつた。彼は風呂場近くの廊下で氷を砕いては氷嚢の變り目毎にやつて來る。

「大丈夫ですか、死にやしますまいね」

「死ぬなんて事があるもんか」

「死ななけりや可うござんす、永く掛つてもね、だがねえ力様、私は此病氣の源を知て居ますよ」

「何だ」

「皆なで苛めるからでさあ、學校では苛められ家では苛められでせう、其れを篤子様は口に出して怒らないから不可えんです、悲しいと思つても口惜しいと思つ

ても顔色に出さねえとお肚の中に内昂する許ですからな」

「爾かなあ」と力は歎息した。此時篤子は微かに唇を動かした。

「ねえ乳母、草履を什麼しやう草履を」

二人は黙つて息を凝らした。

「御飯も上げないで本當に濟みませんわ、勘忍してね、ね、ね」
眠りながらの歎息が一時に起ると、篤子は眼をばつと開いた。

「あゝ私」

「おう眼が覺めて？」と力は枕元から顔を覗いて微笑して見せた。

「私今ま何か言て？」

「いや何にも」

「爾？」と言って再び眼に落ちた、が十分も経たぬ中に又もや眼を開いた。

「力さん、濟みませんね、何卒御寝みなすつて頂戴、仙どん難有う」

「餘程熱が退きましたね」と力は冷たい牛乳を入れた吸呑を口に當てがひ。「さあ
飲で御覽」

篤子はちうく音する様に吸つて「あゝ美味いわ」

「もう癒つたんですね」と仙七は眼に喜びの光を浮べた。

「伯母さんは？」と篤子が訊く。

「もう皆な寝さしたよ」

「爾？濟まなかつたわ私、皆様に御心配を掛けて」

「其那事は考へずに静に眠る方が可いよ」と力は妹にでも言ふかの如く言て髪
を撫で、やつた。篤子は黙つて眼を閉じた。大丈夫だといふので仙七は室へ戻つ
た。

と篤子の美しい眼が又もやばつと開いた。

「力さん御寝みなすつてね」

「可いよ心配せんでも」

「だつてね、悪しから」

「何が悪いの？」

蒼白めた頬が微に根らんだ。「皆なに種々な事を言はれますから」

「馬鹿な事を」と力は一言に採消す様に言た。

「人が何を言ても構やしないさ、ねえ篤子さん假りに僕が病氣だつたら君は僕の看病をしてくれるだらう、爾だらう、其れ見給へ、當然の事ぢやないか」

篤子は何か言はうとしたが黙つて了つた。力も黙つて額に手を當てた。

「あゝ又た熱が出たね」

「えい」

「だから詰らない事は思ひつこなしだよ、良い子だからね」

篤子は苦しいながらも微かに笑つた。

翌日終日力は篤子の看護をした。夕方には疲れ切て自分の室へ轉げ込んだが、眠ることもなく三時間餘まり前後も知らなかつた、眼が覺めると電氣が點いて居る。彼は急いで篤子の室へ行た。篤子は眼さめて居た。而して力の顔を見るや否や微笑んだ。

「什麼？篤さん」

「もう可いのよ、明日から起きるわ」

「豪い元氣だね」と力は笑つた。今夜も富喜子が母と共に見えたので琢磨は例の新作を朗讀して居る爲に何人も篤子の室に訪づれるものはない。篤子は病疲れの顔に絶えず喜悅の色を漾へて語り續ける。力の睡眠中總五郎とお時が枕元で看護婦を召ぶ召ばないに就て議論をしたが、とゞの結果今ま一日此儘にするといふ事

に決まつた。篤子は其れを話して憊う言た。

「私看護婦なんか厭ですわ」

「なせ」

「でも看護婦が来ると貴方が来てくれなくなるんですもの」

「馬鹿だね」と力は笑つた。「看護婦が来ようと来まいと僕は仍且添きつきりさ、主治醫ぢやないか」

「爾？其れぢや看護婦が来ても可いわ」

「全で赤ん坊だ」

二人は笑つて眼と眼を見合はした。憊那事を言てる中にも力は心の底から嬉しかつた。而して昨日の疲れも心配も此の一言の爲にすつかり忘れて了つた。

「貴方熟く御眠られて？」

「あゝぐつすり眠つたよ、篤さんは？」

「私眠れなかつたのよ」

「どうして？」

「だつてうゝゝゝとなると貴方が室へ入つて被來やる様な氣がして、ひよいと眼が開くんですもの」

「僕の來るのを待て居たの？」

「えい」

「其れぢや僕を起せば可いのに」

「だつて貴方だつて御疲れでせうから」

「構はんさ、二三日位は眠らなくなつて」

「其那事したら貴方が病くなるわ」

「爾したら篤さんに看病して貰はう」

聲を出して笑ふ程篤子は快くなつた。

「結構ですな」と何時の間にかお時は襖から顔を出して言た。「今までうん、言
て居たが力さんが見えると急に快くなるんですね」

「伯母さん」と力が言た時お時の姿が見えなくなつた。と同時に「力さん御飯は
？」と催促する様にお勝の聲。力は起上がった。

「飯を食つたら直ぐ来るからね」

「えい成るだけ早くね」

「あ、飯を鵜呑にして来るよ」

力の去た後で篤子は安らかに仰向になつたまゝ天井を見詰めて考へるともなく
考へた。何といふ親切な人だらう、憐れ思ふものゝ面と向つては改たまつて御禮
の言葉が言へない、去て了つてから言へば可かつたとも思ふ。其癖心の中では二
人の間には此那事が當然の事であるのではなからうかとも微かに思はれる。

環やお時等が氷嚢を戴せてくれても只だ一ヶ所に戴せたきりで自然に氷の溶け

るのを待てるかの様、其れと異つて力のは氷嚢を抑へるにも力が籠つて居る。額
から鬢、鬢から脳天、脳天から後頭部へと絶えず氷嚢を動かして髪の間から脳
の底まで氷の冷氣を打ち込ますには置かぬと言た様、苦しい熱から薄霧が剥ける
様に少しづつ正氣に立復つて軽やかに眼が覺めかけると、さら／＼と零るゝ髪
の上に静に氷の崩るゝ音を聞いた時の何とも言へぬ爽々しい心持―あゝ力さんが頭
を冷やして居らつしやるんだと思ふと、得も知れぬ心強さが嬉しさと共に湧いて
来る。

篤子は凝と身動きもせず其の事を考へた。而して力さんは今頃御茶の間で大急
ぎで御飯を鵜呑にして被居やるだらう、と思ふと急に可笑しくもあり又た氣の毒
の様な氣もした。

秀子は一日隔位に見舞に来る、而して遠慮深い顔をして茶も飲まず菓子に手も出さず、三十分と経たぬ中に歸るのであつた。彼女はあの日を限りとして學校を退がつた。「一日も早く養子を迎へて父に安樂をさせたい」恚ういふ事を顔も赧めずに言た。聞てる篤子が却つて耻かしい様な氣がした。

篤子も其れきり學校を退いて了つた。夕方になると少し位熱が昇るけれども晝の中は左までになくなつた。彼女は最早少刻も手を休めて居られない、出来るだけ室を奇麗に掃除して其れから裁縫をしたり刺繡をしたり、讀書をしたりした。

「其那事をするのは未だ早い」と力は嚴しく言たけれども聽かない。折々軽い咳が出る。それすら次第になくなつた。

天氣の好い時には庭に籐椅子を置いて其れに腰を埋めながら晴れ々しい聲で

唱歌を唄ふ。什麼かすると唄つてる中に我聲に魅せられて自然と涙が出る事もあ
る。病後の軽い明るい心持！其れに加はつた新しい喜悅！其れは自分に意識が
なくとも奇妙に波立たしい胸の鼓動と全身に響を打つ血の充實、或時は呼吸も吐
けぬ程自分の心が踊つて素足の儘芝生の上を駆け廻りたいと思ふ事もある。春の
面影が既に去て庭は新緑の鮮やかに何の木もく若い活氣に満ちて、大空の碧、
小鳥の啼聲、軽く吹く初夏の青嵐、其等は皆な篤子に何か知らん幸福を囁いてる
かの様。

彼女は朝に起きると庭に出て充分爽やかな空氣を吸ひ、其れから竹箒を手にし
て門の方に廻る。丁度其の刻限に力が角帽を被り肩から大きな袋鞆を提げて出
て来る。

「行て被來やい、今日は早いの？」

「あゝ早いよ」

是れだけの對話だが、これが毎朝の楽しみだつた、時には晚いといふ事がある、又時には今夜は何々會だから夜中になるといふ事もある。併し力は晚かつた事もなければ何々會に出席した事もなかつた。力に別れてから篤子は例の仕事に取掛る、彼女は刺繡に取掛りながら何時の間にか力の事を想ひ續ける、而して獨で笑つたり獨で顔を赧めたりした。或時には夢中で針を運んで牡丹の花一つを繡ひ上げるまで知らずに居た事もあつた。「どうして間違はなかつたんだらう」慙う怪しんで見て、頭と手とは別々に働き得るものだと感じた。「私は幸福だ」と彼女は一日初夏近い日に輝く庭を眺めながら獨で言つた。「皆さんの御影で病氣が癒つたから私は什麼な事でもして御恩返しをしなければなりません」慙う思つてる内に種々な希望が簇々と出て来る、伯母さんや祖父さんを喜ばしてあげたい、乳母や文ちゃんを樂にしてやりたい、虎さんや仙どんに出世さしてやりたい、力さんは屹度豪くなるだらう、秀子さんは……」

希望は限りもなく擴がつて纏りが付かない、不圖氣が付くと「自分、什麼なるんだらう」はたと當惑したが、自分は什麼にかなるだらうと直ぐに決めて了つた。

「皆なが仲好くして暮らしたら什麼なにか嬉しいだらう」

奥の室で又もや總五郎とお時の争ふ聲が聞えた。

「あゝ」と篤子は耳を掩す様にして眼を塞つた。と足音荒く總五郎が篤子の室へ入つて来た。鼻穴が妙に擴がつて唇を噛むだま、眼をどんよりと曇らして呼吸切つて居る。

「什麼なすつて？ 祖父さん」

「馬鹿にしてやがる、親に向つて言ふべき言葉か言葉でないか、本當に畜生ッ」

「どうなすつたの？祖父さん」と彼女は再び問ふた。其聲は雷んで居る。總五郎は初めて篤子の心配顔に気が付いたらしい。

「何でも無えがね、あんまり人を馬鹿にするもんだから、打撲つてやつたんだ」

「伯母さんを？まあ何だつて其那事をなすつたの？」と篤子は立上がつて片肌を脱いた肩を入れてやり。「御祖父さん厭よう、其那事をなすつちや」

「打殺してやらうと思つたんだが……なにね、お前の全快祝をしろと言つたんだ、無駄だから厭だといふんだ、無駄だつて畜生ッお前何ちやねえか、無駄だつて手前達あ什麼な事をしてるんだと言つたんだ、するとお金がありませんと吐かしやがる、俺あ爾いふ肚を知てるんだ、なにね、店の方は株が下がつて思惑が外れたんで損をしたもんだからね、少しばかり彼奴に借りたんだ、五萬や十萬借りたつて

何でえ、畜生め、其れを催促しやがつたんだ、お前の病氣本復の祝ぐれえ幾ら要ると言ふんだ、畜生ッお前、畜生お前お前畜生」

昂奮しきつてるので誰がお前だか畜生だか混線して了つて到頭舌が廻らなくなつて了つた。

「祖父さん、私御祝なんかして戴かなくても可いから叔母さんと仲好くして頂戴ね」

「うんにや成らねえ、彼奴あどうしても蟲が好かねえんだ、なあ篤子、今に當つたら畜生め、金剛石の飯を焚いてお前の祝をしてやるせ、其れまで待てくれ、なあおい、損をしちや我が子にまで馬鹿にされるよ」

「私一寸行て見ますわ」

篤子は室を出やうとして不圖振返ると總五郎の白髪頭が慄へて居た。

「損をしちや我が子にまで……畜生奴」

お時の室は女中二三人、環、琢磨の面々が蒲團を圍繞いて誰か、醫者へ電話を掛けやうとするのをお時が制めて居た、其處へ篤子が入つて來た。

「什麼なすつて？ 伯母さん」

篤子は心配さうに枕元へ寄つた。

「お前の祖父さんに打たれたんだよ」とお時は顔を擧めて言ふ。

「まあ御怪我がなくつて？ 御免遊ばせねえ祖父さんは短氣なんですから」

お時は「ふうん」と笑つた。「環さん能く聞いてお置きよ、御免遊ばせだつとさ。」

憚ういふと人柄に見えるもんだよ」

篤子は黙つた。

「お母様、痛いのか？」と環が言ふ。

「狸め人の頭を拳骨で撲りやがつて貉爺奴死損ひの癖に、おう痛え〜」

「何處が？」と琢磨が訊く。

「何處だか解るもんか」

「冷静にしなくちや不可せん、お母様は昂奮してるから」

「ぶん撲られて冷静にしちや居られないわねえお母様」

「何だつて撲られたんです」

「篤子に聞いて見な、もう狸爺いから聞いたらう、おう痛え〜」

「騒の方が大きいんだ、僕は見て居たが只た一つ頭の鬘の上を撲つただけでしたよ」

「鬘の上だつて痛いのは痛いよ」とお時はぶり〜怒り出して言た。「私が撲られるのをお前が見て黙つてたのかい」

「加勢する譯には可かないや、母親にお祖父さんだもの、忠ならんとすれば孝ならすさ〜」

「彼方へ行ておくれ」とお時は起上つた序に「篤子お前は何を見物してるんだ

い」と怒鳴た。

「はい」と篤子は温和しく會釋して室を出た。

一三

自分の居室へ歸ると總五郎が先刻の姿勢の儘今だに其處に坐つて居た。篤子は黙つて窓の下の机に凭れた、淺間しい様な情ない様な氣が胸充滿になる。彼女はほろり、涙を零しながら我が膝を見詰めた。總五郎は仍且身動きたにせぬ、殆んど魂の抜けた人の様に、襟元が開いて胸の骨が露はれ、左の肩は誰かに曳き下げられた様に首筋の衰へを見せて其れを直さうともしない。物に驚いた如く又た昂奮が極まつて知覺を失つた如く。此日に限つて顔の皺が深く頭も埃染みて見えた。

二人は何時まで無言で居た。奥にはお時の肝癢聲其れに伴れて女中共がどたんばたん足音の慎みも忘れて慌てる音が聞ゆる。

「早くしないと又たお叱言だよ」

「早く／＼つて手が三本とありやしないよ」

「葡萄酒を召上るんだとさ」

「爾ぢやないよお医者様の御手洗だよ」

「あら私此處へ御盆を出して置いたのに什麼して」

「お勝どん御急ぎだよ」

「あ、忙しない目が廻りさうだ」

「全くだ何も彼も一時だもの」

「どうせ此月でおさらばだから構やしない」

「何といふ厭な家だらう」

窓越しに中庭の向ふ、勝手の棚の見ゆる窓から女中共の蔭口が手に取る如く聞ゆる。

「本當に爾だ」と彼女は思つた。「何といふ厭な家だらう、爾思はれても仕方がな

い、伯母さんはお祖父さんを狸だの貉だの死損なひだのと言ふ。お祖父さんは伯母さんを畜生／＼と喚き立てる。而して奉公人は種々の綽名を作つて二人の主人を罵る」

篤子は悲しくなつた。「お祖父さん什麼したら可いんでせう」

「何が？」と見向きもせず茫然と言ふ。

「何がつてお祖父さん、叔母さんと仲好くして下さらないの？」

「何が畜生あんな奴畜生つ」

篤子は耳を塞いで、「もう其那事を仰やらないでね、お祖父さん什麼して不可の？」

「俺お彼奴の面を見るのも厭だ、其りやお前此の商賣は浮沈が多いさ、多寡が五萬や十萬の金だ、其れを畜生催促しやがつて、今に什麼するか見てやがれ」
起上がる總五郎を惹止めて篤子は泣いた。

「お祖父さんは其那事を仰やらないで仲よくして頂戴ね」

「誰が畜生と仲好くするもんか」

「お祖父さんと伯母さんとは親子ぢやありませんか」

「親子も絲瓜もありやしない、おい放せ」

「いゝえ放さないわ、私放さないわ」

「放せつたら放せ」

「放したら御祖父さんが又伯母さんを打つんでせう」

「當然だ、俺あ考げえれば考げえる程忌々しくてならねえ」

篤子は犇と總五郎の帯に攫まつて顔を見上げた。總五郎の眼から大粒の涙が一滴静に頬を傳つて居た。

「お祖父さん、どうして恚う家の中が睦ましくしないでせう」

「俺あ知らねえ」と總五郎は呼吸を揣つて篤子の手を拂つた。「金の前には親子も

仇だ」と言ふや否やひらりり室を出た。

「あらお祖父さん」

「來ちや不可え」と總五郎は外から襖を抑へた。篤子は其處に泣倒れた。

家の中は急に静になつた、女中の足音も聞えぬ、人の聲も聞えぬ、死んだ様に静かな眞晝！篤子は呼吸を殺して奥の様子に耳を敬だてた。仍且何の音もない。

「お祖父さんが何處かへ御出ましになつたらう」彼女は吻と安心した。

安心しながら篤子は又もや考がへた。金の前には親子も敵だとお祖父さんが仰やつた、本當に爾かしら、いや爾でない、お金なんてものは決して貴いものでない、併しお祖父さんと叔母さんはお金の事で仲が悪いのはお金があるからではあるまいか。篤子は確と當惑した。

「お金がある爲に仲が悪いのか、無い爲めに仲が悪いのか」
ある爲でない、片方にあつて片方にない爲だ、兩方にあつたら屹度仲が好くなるだらう。

篤子は單純に恚う考へた。何も彼も金の世の中だといふのは此事を言ふのだお金さへあれば二人は喧嘩する様な事もなからう。若しお金があつてお祖父さんと叔母さんと仲好くして此の一家が皆なで楽しく暮らす事が出来たら什麼なにか嬉

しいだらう。

「お金が欲しい」と篤子はしみじみと思つた。

「而して皆なで仲好くしたい」

途端に篤子ははつと身體を慄はした。お時の室で雷ならぬ物音。

「手向をしやがつたな此の小僧」

「亂暴はお止しなさいよ」と琢磨の聲。

「力さん什麼かして頂戴よ」と環の聲。

篤子は突然袋戸棚に頭を突つ込んだ。

お時の室は修羅の巷の如く荒らされた。老いたる總五郎は双肌脱になつて暴れ廻つた。琢磨は其背後に確乎と組付いたが、組付いたまゝ疊の上に引摺られた。お時は布團の上に坐つたまゝ、虚病を忘れて故意と平氣に長煙管で輪を吹て居る。「打つなら打つが好いさ、借りたものを返してから大きな口を利く事たよ」

「何を畜生ッ親不孝者めが、誰のお蔭で一人前になつたんだ」

「其りや此方から言ふ事ですよ、誰のお蔭だか言て御覽なさい、大道で道具を賣て居たのが疊の上で商賣が出来た様になつたのは誰のお蔭ですか、私がお邸へ奉公に行かなかつたら。私が……」

憊うなつて来ると例の光琳風の上品一點張の貴婦人の裾がすつかり消えて、送り出るのは昔の生地其儘である。

「お止しになるが可いでせう、伯母さんも悪い」と力が端然と坐つたまゝで言ふ。

「私が悪いつて？何が悪いの？さあ何が悪いんです」

泣聲になつてお時は力に詰寄た。

「貴方が騒を大きくなさるから悪いんです、お祖父さんだつて無論よろしくありませんよ」

「俺は無論可かあ無えさ、可かあ無えが此畜生の様に悪徒ぢや無え」

「何が悪徒だらう」と環が言ふ。

「黙つてろお多福、手前だつて今に碌なものにやならねえ」

環は頬を膨らして唇を曲げくりりと背後を向けた。

「さあ出て行け」

「貴方が出なさるが可い」

「どうしても出て行かねえか」

「出ないと言たら什麼するの？」

「此畜生」

琢磨の組付いた手を挽ぎ放して總五郎は片足に煙草盆を蹴飛ばした。灰煙がばつと立つと此時早く彼の手がお時の髪に掛つた。

「さあ什麼するか阿魔」

五本の指に髪が絡むと、踏出した足に力を入れてぐつと一息に振廻さんとする

「刹那！」

「お祖父さん！」

血の出る様な叫びと共に篤子の片手は早くも總五郎の腕を握った。

「お祖父さん、お金があります、お金がお金が〜」

片手に總五郎を制めて片手に握った包み袋を膝の上に敲き出すと、中から出たのは公債証券、地所家屋の謄本、遺言状！

「おう是れは」と總五郎は思はず手を弛めた。

「あゝ遺言状！どうしたんだ」

「えつ何ですつて？」

髪を引かれた痛さよりもお時の驚が更らに格別であつた。

「遺言状ですつて？」

「おう公債が 二三四五六七……ざつと五萬圓」

「五萬圓ですつて？」

「地所は……貸家の方も残らず……」

「まあ此那のがあつたのかねえ」

總五郎とお時は喧嘩を忘れて等しく此の書付や公債に噴入つた。

「これがお金になるの？」と篤子が訊く。

「なるともく此奴愛好、ものがあつた」と總五郎はにこ〜として篤子の顔を見る。

「お前は何十萬圓といふ財産家になつたよ」

「ぢや是をお金にしてお二人でお分けなすつてね」恚う言て篤子は歎息上げた。

「どうか仲好くして頂戴ね」

黄金の光！二人の驚喜と怪訝！而して互に見交はす眼は「是れが自愛一人の所有であつたら什麼に好いだらう」といふ心を語つた。

「何處にあつたんだ」

「什麼して手に入れたの？」

二人の間に對して篤子は包まず物語つた。鼠の事、袋棚の事、二重底の下に藏つて置いて其儘忘れて居た事、十二の歳に初めて見た時には何か知らん大切な物だと思つたが、今日まで考へた事もなく思ひ出した事もない、只だ遠く微かな心持で何處かに寶物を藏つてある位に思つて居た、其の寶物が今ま二人の前に出されて二人が其の爲めに睦ましくする様になれば本當に是が何よりの寶物である事。——篤子は肅しやかに膝に手を突て語つた。一句／＼に二人は首肯いた。

「何てえ優しい心掛だらう、俺あ面目次第も無え事だ、もう喧嘩は止したよ」と總五郎が言ふ。

「貴方さへ手荒な事をなさらなければ私が何をするもんですか、篤子の氣前に對しても馬鹿な行爲は憤りませうね」とお時と言ふ。

篤子は眼に涙を湛めて喜んだ。一封の遺言狀の爲めに一家が薄暗い冬から春の光に移つた。慙うと知たなら早く氣が付けば可かつたのに惜しい事をした。篤子は慙うも思つた。

環も力も琢磨も去た。後は總五郎とお時のあらゆる讃辭が篤子の上に浴びせられた。財産の處分法に就てもお時から何か言た様であつたが、二人はちらりと篤子の顔を見ると急に何も言へなくなる。

「少しでも手を付ける様な事があつては篤子に濟まないから遺言狀は俺が保管しやう」

「其代りに登記謄本や公債は私が藏つて置きますわ」
二人の妥協が成立した。

「これで目出度く解決した、どうだ仲直りに一盃やらうちやねえか」

「えい賛成ですね」

「藝者の五六人も召ぼうかね」

「吝つたれた事を言はないで二十人許も御召なさいよ、費用は私が持つから」

「お前に奢つて貰ふと後が恐いからな」

「ちやお止しなさいよ」

「止すのも詰らないね、可しツ一つ景氣直しにやつゝけるとしべえか」

「爾ですとも篤子の病氣本復祝ですもの」

篤子は何か言はうとしたが、二人が餘りに勢ひ付いてるので其れを差止める勇氣がなかつた。

「可からう、電話だ、小辰に春子、のん子に梅太郎其からお高に其れから……」
饒舌り續けて總五郎は外へ出た、篤子も出やうとするをお時は呼止めた。

「惜しい事をしたね本當にお前は考へがなさ過ぎるよ、お祖父さんの居ない處で窃と私にだけ預けて置けば可かつたに」

篤子は何の氣もなく首肯しながら室を出た、廊下を通る時總五郎は電話口から聲を掛けた。

「一寸篤子」

「はい」

「惜しい事をしたな、お時の前であんな寶物を出す奴があるもんか、俺にだけ渡して置けば可かつたに」

「でもお祖父さん、あれで伯母さんの御機嫌が直れば何よりですわ」總五郎は電話の方に向いた。

「おい、ちやら子か、どうだい景氣は、些とは好い人が出来たかね」
篤子は匆々に其處を出て居室へ曲らうとすると其處に仙七が眞紅になつて立て居た。

「じよく冗戯ぢやねえ、篤子様、馬鹿な事を、私は今聞いた、馬鹿な、本當に呆れつちまふ」

「どうしたの仙どん」

「私があんなに言て置いたのに忘れて了つて我利く亡者に遣て了ふなんて、何てえ貴方は何えて貴方は、もう駄目ですく皆な奪られて了ふんだ、文なしにされて逐出されるんだ、私知りません、知らねえくくく知らねえやい、私私私や亡くなつた若旦那に濟まねえ」

仙七は涙をばろく零した、而して篤子に攫みかゝる様にして言續けた。

「私や知らねえ、勝手にするが可いや、あくく俺あ情なくなつて來た」

珍客

篤子の提供した財産は兎も角も南一家を賑した。お時は毎日の様に出歩いた、總五郎は喘息も起さずに毎日株式の店へ出る、而して夜になると一堂に會して投球盤やらピンポンやらで陽氣に笑ひ騒ぐ。

「本當に嬉しいわ」と篤子はしみじみと思つた。乳母の許へも行く事を許された。財産の事を語つた時文太郎は頭を掉た。

「其れや本當に仲直りしたのではありません、今に御覽なさい屹度破裂します」

お濱はお濱で眼を瞬たいて口惜しがつた。

「御嬢ちゃんは餘まり無鐵砲です」

けれども篤子は少しも悔まない。

「だつてあの爲に憊うして乳母と會へる様になつたんだから可いわ」
お時は折々篤子連れて三越や帝劇へ出掛ける。着物や頭の物持物まで一通のものは買ってくれた。

「何もいち／＼する事はないよ、欲しいものがあつたら遠慮なしに言ひなさいよ」
篤子の物を買ふ度に環はぶり／＼する、お時が何を言ても返事もしない、而して眞劍に涙を流して袖を噛む。

「お前は我儘過ぎよ」とお時も怒鳴る事がある。

「えい我儘ですとも、御母様の子ですもの」

「お前には帯が十五六本もあるぢやないの？篤子には絲錦の帯を今度初めて買つたんですよ」

「いくら有つてももう柄が古いわ」

「仕様がなね、其れぢやお前のと交換へるが可い、可いかい秘密だよ、これは

篤子が知らないんだから」

是で環の機嫌が直るが時として親子は二三日ものを言はぬ事がある。

「勝手にするが可い」

「勝手にするわ」

其辯終りはお時の方から和議を申込む事になるのである。

此の状態が続いてる中にお時の顔が段々曇つて來た。其れは篤子と力が次第に親しくなるのを見留めたからである。

「氣をお付けよ環や」彼女は憊う言ふ。

「何を？」

「力さんの事さ」

「力さんが什麼したの？」

「何だか篤子と變ぢやないか」

「變だつて可いちやないの？」

「好くはないよ、若し間違でもあると」

「間違て何なの？」

お時は説明に困つてまご／＼する、其れを環は面白さうに睨めてにや／＼笑つて居る、けれども環の肚の底は好い加減に苛々して居る。

「篤子さんも餘まりだ、人を馬鹿にしてるわ」

環の苛々するに引替て篤子は一家の和睦の樂から恰がら春の小鳥の如く陽氣に氣輕に明るい心持で跳ね廻り唄ひ廻つた。彼女の涼しい眼は益々深みを帯びると共に自然と育つ情熱の炎が何物かを待て燃え付かうとするかの如く見えた。豊饒にある髪の毛、くつきりと白い額際に初々しい生毛が剃刀も當てずに残つて、ふうわりと色めく額顚から襟足が處女の水々しさが滴りさう。彼女は何を見ても笑ひたくなつた、人に咎められ、ば咎められるだけ笑ひたい。病氣かしらんと自分

でも思つて見た。彼女は久し振で淺蟲に居た時の様な心持になつた。

「乳母も文ちゃんも仙どんも彼様いふけれども、財産を出してあげたから慙う幸福になつたんだわ」と彼女は思つた。

お時と共に環も段々気が苛立たしくなつて來た。彼女の疳癩が破裂すると女中共が誰一人近寄るものもない、朝には洗面の湯が温いと言て怒鳴る、御菜が不味いと言ては箸の先で皿を突つ突き返す、室の掃除が行届かないと言ては指で障子の格を一本づゝ撫でる。散々皆を困らし抜いた後は怒り疲れて晝中も構はず寢て了ふ。而して時ならぬ時に起きてけろりとして飯を急ぎ立てる。什麼かすると一日一ばい寢てる時がある。爾いふ日にはお時が心配さうに枕元へ寄て介抱に手を盡す、環には其が何となく愉快であつた。彼女は母が心配すればする程苦さうな顔をするのである。

「何の病氣だらう」とお時は氣を揉んだ。而して、「一日も早く力と夫婦にしてやらなければやなるまい」と思つた。時折は力に向つて其れらしい事を仄めかした。

來年は醫學士になるんだから早く嫁を決めて置く方が可い。恚ういふ話の出る度に力は恚う言た。もう少し待て下さい僕にも考へがあるから」

又其の頃からお時は成るべく篤子と力を近付けない工風をした。二人が話してると毎も篤子に用事を命じた、而してお勝や其他の女中共に一層探偵を厳しくさせた。

環が疳癩のふて寢をする時にはお時が力を召で種々と環の介抱を頼み、窃と自分だけが室を外す事もあつた。力は篤子の病氣の時と同様に親切を盡くした。

或日力のお祖父さんから手紙が來た。

「貴様も卒業間近に相成り候へば、直ぐに妻を迎へるなり又は外國に遊學をするなり何れにせよ今より方針を決め置く事必要にて候、幸ひ拙者不日公用を以て上京致可く候に付き其の折篤と相談可致く候」

「お祖父さんが被來やる？」とお時は眼を睜つた。

「随分恐いんですつてね」と環が言ふ。

お時は篤子や環に御祖父さんの口八釜しい事、行儀や作法の嚴しい事、頑固で没曉漢で横柄である事などを語つた。

「其那に恐い方ですか」と篤子も胸を轟ろかした。

「家へお宿りになるの？」

「いゝえ多分宿屋でせう、彼様人に宿られたら壽命が縮まりますよ」

此の話があつてから五六日を経た某朝、篤子は庭へ出て黒犬の脊中に刷毛を掛け、居た。黒犬は最早六歳である、彼の顔は依然として醜く胴が長く何處までも野良犬の相好を失はない。「顔は醜なくも私は可愛わ」と篤子は言ひくした。今ま黒犬は耳を低れ顔を突き出して我が前足に載せ氣持快ささうに篤子の爲るが儘に任せて居る。

突然玄關口に人の足音がした。

「頼まうく」

篤子は不圖生垣の隙から覗いて見ると、其處に一人の老人が立て居る。埃染みた山高帽に藍鼠の薄外套、其下から光澤氣のない袴が見える。

「頼まう」と三度言つた時、小倉の白い鼻緒の付いた日和下駄が見えた、花毛氈の様な模様の鞆を敷臺にとさりと置いて氣短かさうに洋傘で板を敲き、又もや一段と聲高く

「頼まう」

「誰も居ないのか知ら」と篤子は氣の毒に思つて庭木戸へ廻らうとした。途端に其の人の顔がくるりと此方へ向いた。

「其處に居るのは誰か、黙つて居らんと早く取次げ」

「はい只今」と篤子は吃驚して言つた。

「只今ぢやない、返事する暇があるなら其の木戸を開けい、福永ぢや」

扱てはと思ひながら篤子は急いで木戸を開いた。

「おう此方の方が近くて可い、皆が何處に居る」

憊う言ひながら老人はのそくと椽に上り出した。

「お時を呼でくれ、力は留守か」

聽てお時が出て来た。

「まあ能うこそ被來やいました、先達てから今日か明日かとお待ち申して居りましたが、電報でも下さると皆なで停車場へお迎ひに参りませうと、環なぞは其れを樂みにして居りましたので、さあ何卒、御疲れで被居やいませう」

お時は膝を正して襟を扱いてね妙に口を小さくして肅しやかに挨拶する。「あゝ爾」うん成程」老人は簡短に「さあ、仍且立て居た。

「さあ、何卒、環や〜」

「いや爾しては居られん、兎も角役所の用事だけを済まして来る」

老人は鞆を其處に置いて足を返した。

「左様でございますか、其れであの御宿は？」

「宿？宿は此處に決めて置かう」

「はあ」

「當分厄介にならうかのう、爾ちや其れが一番可い様だ」

「はあ」と言て「どうぞ爾遊ばしませ」と次ぎ足す。お時の聲に力がなかつた。

一樹老人は七十六の高齡である。頭も髭も腮髭も眉も雪の如く白い、喉の骨が高く頸の肉が落ちて居るけれども身丈高く廣い肩幅岩疊な骨節は流石に維新の際に國事に奔走して幾度か白刃の間を潜つた面影を留めて居る。口數が極めて少なく、滅多に笑ふ事すら無い、寝しなには自分の衣服を自分で疊んで決して人手に懸けない、朝は五時頃に起きて夜は十二時頃まで起きて居る。

「ほんとに樂々眠る事も出来ない」とお時はぶつ／＼呟した。

夕飯が濟むと力、琢磨、環、篤子等を集めて話をする、話をするのではない、皆の話聞くのであつた、幾時間でも彼は膝を崩さない、是には力も琢磨も閉口した。篤子は恚ういふ木彫の様な人を初めて見た、何となく窮屈で何となく恐い

けれども何となく懐かしい様な氣がした。

「恚ういふ方は本當の人物といふんだらう、これに比べると宅の御祖父さんは餘まり品行が悪過ぎる」恚う思つて篤子は赤面した。

四五日は忽ちに過去つた、老人は日和下駄で以て晝一日市中を廻り歩いた。外出せぬ日には黙つて琢磨の室へ入り書架の本から机の抽出まで開けて見た。

篤子の驚いたのはお時の様子の變はつた事であつた、今まで十時頃に起きて時折は晝寐をし夜の就寝時間も定まらなかつたのが、朝は老人に負けずに起き夜は老人の床に就いた後で寝る。

「お前も務めなけりや不可いよ、少時の辛棒だから」と環をも勵ました、環には朝日を見るのは生れてから初めである。彼女は朝から晩まで呟し續けた。

「あんな爺い早く歸ると可いのに」

老人の世話、膳部の事やら給住やら床の揚げ下しやは一切環の役目となつ

た。

「感心な子ぢや」と老人は環を賞めた。「今一人の篤子とか言ふ子は役に立たん様ぢやね」

此の詞は全家に傳へ渡つた時、お時は何時に似ず顔の紐を解いた。或時篤子と力は風琴に向て合奏した。此頃は不思議に二人の聲が軟かい諧和の顫動を帯びて時として篤子の眼に涙が充滿に湛る事もあつた。

「何だあれは」と老人は言た

「合唱でございます」と環がいふ。

「全で氣狂が怒鳴てる様ぢや、誰だ怒鳴てるのは」

「力さんと篤子さんで……」

「力と篤子？怪しからん事だ、二人で唄を唄ふなんて駆落者の門附の様ぢや、此處へ呼べ」

「はい」

聽て二人は現はれた。

「お祖父さん御用ですか」

「無論ぢや、貴公は女と唄を唄つて居たのう、怪しからん」

「唄は不可せんか」

「不可い、二人で唄ふのは更らに不可」

力は抗はずに黙つた。老人は篤子の方を向いた。

「お汝も平氣で男と唄を唄つては不可」

「何故でございますか」と篤子は不思議さうに訊く。

「何故でも不可」

「では女は女ばかりで唄はなければならぬのでございますか」

「まあ、まあ爾だ」と老人は行塞つた様な聲で言た。「其那事は訊かんでも可い、

女は女らしくなけりやならん、お汝は毎も力の室へ勝手に入るさうぢやね」

「はい一日に幾度も参ります」

「何の用があつて行くのぢや」

「用つてありませんけれども種々なお話をしたり笑つたり……」

「馬鹿なツ。爾那不仕鱈な事は許しませんぞ」

「力さんの御室へ行ては不可いのでございますか」

老人は答へずに環を連れて室を出た。

「何を怒つて被居やるんでせう」と篤子は頭を傾げた。實際篤子には其の理由が解りかねたのであつた。

四

其夜篤子は例の如く力の室で英語の温習をして居た。彼女は頃日ラムの沙翁集を愛讀して居る。ハムレットの矛盾した性格から身に餘る大望に惱める苦しい生活や、オフィリヤの例へば日影に疎き梅の花の様な潔い果敢ない戀などに彼女は幾度も涙を流した。

「何だ泣蟲だね」と力は冷靜かした。

「だつて可愛さうですもの」

「どつちが可愛さうだ」

「ハムレットもオフィリヤも兩方可愛さうですわ」

「篤さんがオフィリヤだつたら什麼するだらう」

「私だつたら仍且氣狂になるわ、駒鳥さんくあゝ此の唄を唄つた時の心持は……」

「…」

篤子は涙をかむで顔を隠した。

「其那に悲しいのか」

「えい誰だつて、私沙翁といふ人は憎らしいわ」

「どうして」

「一人を氣狂にするし一人を死なして了ふんですもの」

「ハ、其れや仕方がないさ、ちや篤さんは仍且大團圓は目出度しくで済む様な小説が可いんだね」

「あら私だつて悲劇は什麼なものか位は解つてるわ、けれども私可愛さうですもの」

「仍且泣蟲なんだね」

「泣蟲だつて可いわよ」

力は限りもなく笑つた。

「貴方可愛さうだと思はない？」

「其りや思ふさ」

「ちや何故笑ふの？」

「篤さんが泣くから笑ふのさ」

「ひどいわく可いわよ」

篤子は眞剣になつて怒つた。「貴方は残酷だわね」

「怒つたの？」

「えい誰だつて怒るわ」と篤子は机に突伏す。其の肩の上から顔を覗く様にして力は左の頬をペン軸の尻で突く。篤子はくるりと向を變へた。今度は右の頬を突く。

「厭よ、貴方の様な残酷な方は」

「オフィリヤが怒つた〜」

「何でも可いわ」

其處へ一樹老人と環が現はれた。

「何をしてゐるんだ」

「いゝえ何も」

「巫山戯て被居やるの？」と環が言ふ。

「其處に坐れ」と老人が嚴かに膝を正した。「先刻彼那に言た事を忘れたか、お前

共が平素に什麼な事をしてゐるかは私はお時から聞きもし此の眼で見ました、今此

處で何をして居たかお前共の口から言て見い」

「本を教へて居ました」

「何の本ぢや」

「沙翁のドラマです」

「ドラマとは何ぢや」

「脚本です」

「芝居の本だね、怪しからん、芝居の本や人情本を讀むなんて以ての外のことや」

「でも是は學校で教科書にして居ます外國では小説を教科書にしてゐるものもありま

す」

「外國は外國ぢや、日本は日本ぢや」

力は黙つて頑冥な祖父の顔を見詰めた。老人は更に篤子に向ひ、「爾いふ本を讀む

事は可い事と思ひなさるか篤さん」

「可い事と思ひます」と篤子は憶せずと言た。

「なに？可い事だ？芝居や人情本……其那ものが面白いか」

「どんな處が面白い」

「だつて二人が可愛さうですもの」

「二人つて何だ」

「互に愛してる二人が死んで了ふんです」

「愛？」と言た老人の眼が稻妻の如く閃めいた時、顔中の皺が伸びたり縮まつたりした。

「馬鹿！」

「お祖父さん」と篤子は涼しい眼を向けた。

「讀では不可せんのか？」

「愛なんて何といふ事を言ふのぢや」

「だつてお祖父さん、私は愛といふ事をもつとく能く知りたいですもの、不可いでせうか」

「其れを知て什麼する」

「私皆なを愛したいわ」

「なに？皆なを？淫奔者奴」

「どうして其那に御立腹になるの？」

「もう何も言はんでくれ、呆れた女だ、私は顔を見るのも厭ぢや」

翌日一樹老人は環を連れて上野へ行かうと言ひ出した。

「力お前も行かんか」

「私も伴れて行て頂戴ね」と篤子が言た。老人は此の無遠慮な言葉に呆れて霎時顔を瞞めたが應て「おう伴れて行かう」と言た。

四人が電車を降りたのは午後の四時頃、初夏の日光は青葉若葉を照らして初裕の肌を爽やかな風が心地よく過ぎて行く。東照宮の前で老人は帽を脱て一禮した篤子も一禮した。環は始終力の傍を離れなかつた、左りとて老人に付添ふて居ねばならぬ、彼女は力と篤子と並んでるのを見ると直ぐ口を歪めて老人の言ふ事にすら返事もしない。

「のう環さん」と老人は言た。「お前達は神社の前を通る時には御辭儀をせにやな

らんぞ」

「はい」

「人様が崇めるものに對しては此方でも敬禮するのが人の道ぢや」
其處に乞食の群が四人を取り巻いた。

「おう汚ない」と環は身を避けた。篤子は墓口を開けて一人くんに多少かづつを與つたが終りに一錢も無くなつたので力に出して貰つた。

「貴方は乞食が好なの？」

「好ぢやないけれども可愛さうだから」

「貴方は慈善家だわね」

「あら爾ぢやないわよ」

二人の對話を老人は聞くともなしに聞いて居た。四人は動物園に入つた。一樹老人は象を見たり熊を見たり猿を見たり、恰ら子供の様に喜こんだ。篤子は例の

如く笑ひ續けた。象が鼻を曲げた。言ては笑ひ、駝鳥の頭に瘤があると云ては笑ひ、鹿が居眠をしてると言ては笑つた、環は何にも言はずに詰らない顔をして胸を突き出して歩いた。

「篤子さん」と老人は言た。「お前は動物の中で何が一番好か」

「何でも好でございます」

「狡猾な狐でも陰險な狸でもか」

「えい、私皆んな可愛んですもの」

老人は次に環に訊いた。

「私狐や狸は嫌ですわ」

丁度此時空は次第に險惡の色を帯びて來た、西は夕日に眩ゆく晴れながら頭の上は黒い翼の如く黒雲が擴がり出す。

「あら雨が降りさうぞ、りわ」

環の聲と共に遠雷が轟き出した。

「さあ急がう」

「お祖父さん、急いでお怪我でもなさると不可せ

四人が動物園を出る時、篠突く様な雨が一度に降つた。

「お祖父さん早く車にお乗なさい」

と力が言た。車はたつた二輛である。

「車が足りん様ちやのう」

「大丈夫です、僕等は歩きます」

環は既に一輛の車に身體を載せて居た。

「環さん、お前は最早乗つたのか」

と老人が言た。

「えい、早く行きませう」

「併し二人は……」

「後で車が來ますわよ」

篤子は強て老人を車に乗せた、二輛の車が雨を衝て走つた。

「さあ行きませう」

「えい、随分大變な雨だわねえ」

「是をお被りなさい」

力は自分の薄外套を脱いて篤子の頭に被せた。

「まあ此那もの」と篤子は笑つた。

「何だか變だわ」

「ぢや二人で被て行かう」

篤子と力はびつたりと肩を寄せて一枚の外套に二つの頭を入れた。雨の故か日はとつぷりと暮れて人の影も見えない。

六

一樹老人は頗る不機嫌で車を降りた。而して出迎へのお時に一瞥を呉れただけ何にも言はずに座敷へ通るや否や、整然と膝を正して座つたまゝ苦がり切て居た。

「お召替になりませんか」とお時が言ふ。

「いや」と簡單に言たきり。

「どつか御加減がお悪いのでございますか」

「いや」と言て直ぐに「お時、お前は私の伴の嫁ぢやね」

「はあ」と驚いた様に口の中で答へる。

「伴の子供を養けるのはお前の役目ぢやが、お前は什麼して二人の子供を彼様やぐざ者にして了つた」

「私は……」お時は恐るゝ顔色を覗いた。

「琢磨は道樂者を集めて芝居者の真似をしたり女優の尻を追駆け廻はして居る、環だけはもう少し人間らしいと思つたが什麼ぢや、今日動物園で雨が降つた時、誰よりも先に車に乗つたのは環ぢや、平素の我儘が彼様いふ時に隠しきれなくなる、其れに環は動物を見ても少しも可愛いとか楽しいとかいふ氣もなく、憫れなものに物を與へて喜ばせやうといふ氣もない、何處から見ても立派な我儘者ぢや、是れではお前二人の子を看すく墮落させる様なもの、小さな行爲に大きな缺點が見えるものぢや、今まで私は欺されて居たが、今日といふ今日初めて彼女の生地を見た、其れでお前死んだ良人に濟むと思ふか」

「はい誠に行届きませんで、私の躰が悪うございますから」

お時は自暴氣味に言捨て、去た。其處へ篤子と力は濡れた着物を着替へてやつて來た。

「お祖父様只今」

「只今」

「おう酷かつたらう、どうした」

一樹老人はがらりと機嫌が直つた。二人が室を出やうとする時老人は力を呼止めた。

「力、お前に用があるから一寸残れ」

力は祖父の前に坐つた。老人は一段と嚴格な態度をして膝を進めた。

「他の事でもないが、力、お前は嫁を什麼する、私も七十六ぢやから、何時死ぬかも知らん、達者な中に話だけでも決めて置きたい」

「と仰しやると？」

「お前の嫁に何か望みがあるかといふのぢや」

「あります」

「どんな嫁が可いのぢや」

「篤さんの様なのが欲しいです、篤さんが欲しいです」

「なに？篤子？あんな仍ない娘を？」

「其れは御祖父さん間違つて居ます」

「何が間違つとる」

「お祖父さんは什麼して仍ないと言はるゝんです」

「仍なからうちやないか、笑ひたい時に笑ひ饒舌りたい時に饒舌る」

「其處が可いんです、僕は篤さんの直情徑行を尊敬するんです、あの女は自分

を偽はる事が出来ないんですから」

「併し女は凡て控目にする事が肝心ぢや」

「控目にするといふ事に虚偽がありま 篤さんは硝子の様です、誰が見ても何

處から眺めてもあの女の氣質は赤裸々に見えます、曇りがありません」

「餘程氣に入つたと見えるね、どうしてあんな女が」

「僕は篤さんと結婚することが出来なかつたら生涯獨身で暮します」

「困つた者ぢやのう」と老人は力の餘りに熱心なのに呆れた。

「お祖父さんが未だ篤さんの品性を御認めにならん様ですが、僕はたつた一つの事を御話しませう、其れで大抵御解りになるだらうと思ひますから」

「什麼な事ぢや、一つの事といふのは」

「つまり篤さんが自分が父から譲られた財産全部約三十萬圓を悉く祖父さんと伯母さんに與つて了つたんです」

「何？財産全部を？」と老人は思はず膝を進めた。

力は熱心に語り出す。

「お祖父さん、貴方は什麼見て被居やるか知らないけれども、お時伯母さんとお祖父さんとは犬と猿の如き間柄です、而も争鬭の源因は毎も金の爲です、親子が金の貸借をして利子までも取るのです、此の争鬭は什麼に篤さんの優しい胸を苦しめたでせう、篤さんは二人の争ひを視るに忍びない處から自分の財産を提供して一家の不和を救はうとしたのです」

「ふうむ」と老人は白髯を握つて。

「ちや自分は一文なしになつたんぢやね」

「爾です、而もお時伯母さんは什麼なに篤さんを虐待したでせう、篤さんの身の周囲には凡ゆる暴言や冷評が雨の様に降て居ました、けれども篤さんは決して其

欠

欠

「でも爺が死んだら此方のものぢやないか」

「其れや爾だけれども：私力さんの事は什麼なつたつて可いわ」

「篤子に好い事をされて黙つて居るのかい」

「其れを考へると癪に障るわ」

其處へ總五郎が篤の籠を提げて庭からやつて來た。

「あゝ此處は日當りが可い、どうも篤が水を浴びなくなつたんでな」

「篤だつて弱りまさあね、飼主が夜泊り日泊りで遊んで歩いてるんですもの」

「俺の留守に餌をやつてくれないのか」

「篤どころですか、食客の餌だけでも手が廻らないんですから」

「ほう、道理で篤が弱つてるんだ」と籠を覗いて舌を鳴らし、「篤鳴かした事もあ

るつてね、おいどうだい些たあ元氣になつたか」

「鳥よりも御祖父さんの方が餘程元氣が好いわ」

「當然よ、鶯鳴かした事もあるつてな」

「お祖父さんなんか何を鳴かしたんだか仕様がな、ねえ環さん」

「とん子に勝利に蔦丸にちや、争」

「何でも好いよ」と總五郎は唄の様に長く節を付けて言て環の方を向き吃驚した様に大きな聲で

「いよう練馬々々」

「何なの？」

「太いもんだね」

「太くたつて好いわ」と環は故意と真白い脚をばたくさせて蜜柑に手を出した。

「お母さん一つ剃いて頂戴よ」

「お前剃くが可いちやないか」

「面倒臭いんですもの」

八

「何てえ無恰好な身体だ」と總五郎はつくつくと脚を見て言ふ。「胴が長くて腹が凹んで其代りに尻が出張て而して脚が馬鹿に短くて、一寸見ると瓢箪に脚を付けた様なものだね」

「貴方の孫ですもの」

「同じ孫でも篤子の方は膝から下がすらりと真直だぜ」

「其りや爾でせうとも、始終膝を折て坐つてれば脚が短かく太くなるわ、だらしなくしてると長く伸びるでせうよ」

「爾すると寝轉んで物を食つてる方が長くならなければならぬ譯だね」

「可いわ」と環は初めて起上つた。

「とん子に勝利に蔦丸に……」

「ハ、ハ、ハ、」

「笑つてごまかさうとしても駄目よ、厭なお祖父さん」

「環さんお祖父さんに物を言ふのは御止しよ、篤子ばかり可愛んだから」

「爾ね、ねえお祖父さん、篤子さんを藝者にしてお祖父さんが買ひに行くとき可いわ」

「ば、ば、馬鹿な事を」と總五郎は鶯の籠を庭の木に吊し、聽て戻つて來て眞面目な顔に

「俺は好い事を考へたよ」

「どんな事を？」

「頃日熊本の人に聞いたんだが、熊本の清正公には一本三千兩にもなるてえ杉や檜が澤山にあるんだとさ」

「其れが什麼したの？」

「其れは清正公が植え付けたんで、三百年も経つと一本三千兩にもなるんだから豪儀ぢやねえか」

「儲け口のお話なんですか」

「儲け口ぢやねえが其處で俺が考へたんだ、月日つてえ奴は難有てえもんだ、其處でだね俺は養女を澤山貰はうと思ふよ」

「養女？孫があるぢやありませんの」

「孫ぢや工合が悪い、五人の養女を貰うとする、五歳のを貰ふと十年経てば十五年経てば二十」

「五人も貰つて什麼なさるの？」

「其れを皆んな俺の妾にしたら餘程儉約だらうぢやないか、藝者買なんかするにや當らねえ」

「まあ」と二人は呆れて眼を睜つた。

「どうも其れが可い、吾ながら好い智恵が出たものだ」と總五郎は一人で感心して居る。其處へ一樹老人がのそりと出て来た、次で力と篤子。

「大分陽氣ぢやのう」と老人は床の間の前へ坐つてお時と環が慌て、果物や菓子を取隠すのを冷やかに見下した。「隠さんでも可い、環さんお前の帯は些と細過ぎるのう」

「寢巻ですもの」

「正午近くまで寢巻で居るのか」

環は黙つて室を出た。

「處でぢやね」と老人は改たまつた。「私は今晚國元へ歸らうと思ふが其れに就いてぢやね、力の嫁を決めて行きたい、いろ／＼私も考へたのぢやが此に最も相應しい娘がある、私の決める事に異存があるまいな」

「貴方のお決めなさる事に何で異存なぞあるもんですか、なあお時」と總五郎が

直ちに答へた。

「力さんの御嫁さんですもの、私などは決して否やは申しません、して其れは何處からお迎になるお積で……」

「何處でもない此の家ぢや」

「此の家？」と云てお時ははつと思つた。

「此の家と仰やいますと」

「篤子ぢや」

「えつ」とお時が驚いたのと篤子がさつと顔を赧らめたのと同時であつた。

「其れが可うがす、實に可うがす」と總五郎は椽からぶら下げた足をくると返して膝を折り「私もとうから爾思つて居ました、仍且豪え人の考へは同じでげすな」

「篤さん、貴方は什麼ぢや、力と夫婦になつてくれるか」と老人が言ふ。「いや聞

くまでもなく、承知してくれるだらう、什麼ぢや」

「はい」と言たきり、篤子は平素に似ず顔を上げる事すら出来なかつた。

「力！お前は什麼ぢや」

「無論です」

「無論とは何んの無論ぢや」

「無論く無論、僕は篤さんを愛します」

「巧えな」と總五郎は叫んだ。「巧え事を言ふ、愛します、成程學問があると巧え

事を言ふもんだ」

「ところで篤さん、貴方は什麼ぢや、明瞭と言ふて貫はんと困る、力が厭か」

「いゝえ」

「厭でないのか」

「えい」

「厭でなければ結婚が承知ぢやらう」

「だけれども……」

「だけれども何か事情があるのか、何も包まずに言ふてくれ」

篤子の頬は美しく熱つた、而して凝と疊を見詰めてる中に涙がほろくと落ちた。

「どうしたのぢや」

「私、藝者の子ですから」

と言つて篤子は手巾を眼に當てた。

「何？ 藝者の子だから力と結婚が出来ないといふのか」と一樹老人が掛いた手を膝に置いて篤子の顔を見詰めた。

「其れや全く爾ですね、いくら何でも腹が卑しくてはね」とお時は唇の間から金歯をちら／＼させた。

「構ひません」と力は吼える様に言た。「僕は藝者の子であらうが乞食の子であらうが決して厭ひません、僕は篤さんを愛するから愛すると言ふのです、只だ其れだけです」

「でも血統といふ事も少しは考へて見なければ不可せんよ」

「血統といふのは何ですか、藝者の血統が汚らばしいと仰やるんですか、華族や富豪、紳士の血統だけが正しいと仰やるんですか」と力は膝を進めた。「僕は血統

よりももつと注意しなければならん事があると思ひます、其れは當人の品性です、當人の品性が劣等であつたならば、縦令其れが公侯貴顯の血統者であつても結婚の價値が無いものだと思ひます」

「其れや爾かも知れないけれども、今ま急に決めなくたつて緩くりしても可いちやありませんか」

「いや御祖父さんが御居の中に決めて貰ひたいです是非、是非篤さんに決めて貰ひたいです」

「篤子でなくとも外にも幾らもあるんだから、ねえ篤子お前だつて突然で驚いたでせう、今が今つて其那に急に返事が出来ないわね」

「篤子さんの心は僕が知て居ます、僕の心も篤子さんが知て居ます」

「ちや既に出来合つてるのですか」お時は口を歪めて、チエと奥齒の邊で舌を鳴らした。

「解つた」と一樹老人は力が何事かを言はんとするを遮つた。

「藝者の子であるといふ事は決して構はん」と一樹老人は断然と言つた。

「其りや藝者だつて華族様の胤もあるせ、現に何ぢやねえか、そら月の家の松香よ、そらあれだつて只の代物ぢやねえ、いつか身上話をして泣いて……」と言ひ掛けて總五郎は一樹老人の顔を見るや否や慌て、首を縮めた。「何も俺が聞いた譯ぢやねえが實は其の新聞でな、そうく新聞で其のう、そこん處はまあ爾いふ次第であつて見ると何だもんだからね」

老人はにこりともせずお時を見下した。「私は決心した、篤さんを力の嫁に貰ふ事にしやう、恚ういふ事は後でござらくのなない様にのう」

「でも、あんまり急ですから、其れに……」

「よろしい、力の嫁を決めるにお前の指圖は受けんぢや」

「左様でございますか、はあ」お時は俯目になつて身體を反らした。

「どうぢや篤さん、其れで可いか、貴方が自らを卑下して藝者の子ぢやからと言ふが、私も力も構はんと言たら其れで可からう」

「はい」と篤子は疊に手を突いたが、其儘顔を上げ得なかつた。彼女は泣いて居たのであつた。

暖かい春風が吹けば綻ろぶに決まつて居る花の蕾も、綻ろばぬ中に堅い唇の何時紐を解きさうにもない。二人が話し合ひ、遊び合ひ唄ひ合つてる中は只だ何となく嬉しくて何となく仄温い息に包まれてるかの様、左りとて二人の戀は結婚といふ問題にまでは進まなかつた、ほんの兄妹の様な而して其れよりも少し異つた情を含んだ親しみであつた。其れが今ま俄然として二人の頭に問題が落ちて來た。此の問題は當然來るべきものであつた。けれども二人は殆ど豫期しなかつた。

豫期しなかつた幸福に驚くと同時に二人は互に愛を自然に解する事が出來た。「僕は恚那にまで愛して居たのか」と力は思ふ。

「藝者の子でも構はないと仰しやる程私を愛して下すつたのだ」と篤子は思ふ。
美しい二人の愛は一樹老人其他の前に告白されたのである。

二人は座敷を出た、篤子は我が居室へ歸つて吻と息を吐いた。不圖鏡を見ると我れながら兩頬かけて耳根まで上氣して居るのに氣が付いた。彼女は兩手を頬に當てたまゝ凝と鏡を見詰めた。鏡を見るのではない、堪へがたい胸の動悸と一度に湧いて来る種々な妄想に我れと我が身を持餘してゐるのであつた。

間斷なしに涙が出て来る。肚の中は何だか擦ばゆい様に笑つても見たい、けれども眼からは涙が出る。と見ると鏡に映る庭の景、楓の間を縫ふて物に覆はれた様に同じ處を往きつ戻りつする力の姿!

篤子は嫣然と笑みかけた、が急に慌て、障子の陰に身體を隠した。胸の動悸は一段と烈しい。

夏 雲

大風の過ぎた後の様に、一樹老人の去つた後は急に淋しくなつた。環は例のふて寝を初め出した。而して時ならぬ時に床を飛び出してふいと外へ出る。彼女は家で食事をするよりも珈琲店やビヤホールで食事をする事が好になつた。彼女は時折富喜子と二人で銀座の町を巫山戯ながら歩き廻つた。いかにも抑々しい派手な姿と、其の令嬢とも付かず藝者とも付かず一種奇妙な態度は何人が見ても女優に違ないと言つた。「女優だ〜」囁やぎ合ふ人々の聲を聞き付けて二人は心竊かに誇つた。

「貴方は屹度律子に見えるわ」
「ちや貴方は浪子よ」

「私なんか有樂座位よ」

「ちや私なんか松竹の女優位だわ」

二人は恁那事を言てる中に、本當の女優にならうか杯と胸を跳らす事もあつた。

其れと共に琢磨の夜泊日泊が續いた。

「僕は失戀です」と彼は何人にも言つた。「僕は生きてる甲斐がない、僕の前途は只だ暗ばかりだ」是れを冒頭に千萬言の美しい詩の文句が春蠶の絲を吐くが如く繰出された。が、其れも當分の間で彼は曲物形の綠色の帽を被り天鷲絨の上着を着て新橋赤坂を遊び廻つた。彼の經營中なる新劇壇は此の秋を以て有樂座に旗揚をする積で、女優の募集をしたが、稽古中に座員の一人と女優の一人が墮落をしたので其れも氣が抜けて了つた。琢磨は其那事で毎日少なからぬ小遣を要する、環は環で食道樂芝居道樂に着道樂。

「二人を此那にしたのは篤子の故だ」とお時は苛々して篤子を恨んだ。

「其れにあのお祖父さんが碌でもない事を決めて行つたもんだから」

恁ういふお時も毎日を外にして遊び廻つた。

一家が以前にも増して荒んで來た、けれども篤子は其れに氣が付かなかつた。彼女の眼には凡てが幸福で凡てが光つて凡てが楽しく見えた。若し彼女の胸に一點の曇があるとするれば其れは處女から人の妻と變ずる過渡期の羞耻さと不安位のものである。

老人が別れ際に恁う言た。「今までの様に無邪氣ばかりでは濟まされんぞ、互の慎みを忘れん様にせい」

當座は此の意味が解らなかつたが、日を経るに従がつて段々と解つて來た、而して突拍子もない時に顔を赧めたり、什麼かすると力の眼と眼を見合はす時に吾れ知らず室を逃げ出す事もあつた。何となく二人の間に間隔が出來て、流暢に話して居る最中に突然双方の言葉が途切れて、慌てゝ話の緒を探し出す事もある。

力が學校から歸つて來るまでは篤子は裁縫をしたり繪を畫いたり草花に水をやつたりする、其の待遠しさは今までよりも數倍である。彼女は廊下の足音を聞て其れが力であるや否やが解る様になつた。彼女の眼は益深い色をして唇は一段と引縮つて見えて來た、力が歸つて來ると、直ぐ後から從いて行て投げ捨てた帽子を壁に掛ける、脱いた袴を疊む、而して力の勉強中は窃と邪魔にならぬ様に鐵瓶の湯を更へるやら窓を明けて煙草の煙を追ひ出すやら、而して再び窃と足音を忍ばして室を出る。

憊ういふ現象は力にも氣が付かなかつた、篤子にも氣が付かなかつた。獨り氣の付いたのはお時である。

「ふうん、もう夫婦氣取で居るんだね、ふうん」

是が我が夫となる男である、妻となる女である。憊う思ひつゝも潔い愛の息吹を互に通はして將に來るべき家庭を想ひやりつ春風に翼を任せる小鳩の如く暮し

て居る程人生の樂があらうか。時には二人の若い血が燃ゆるが如く手と手を觸させんとする機會もあつたけれども二人は嚴肅な自重心を失なふ事はなかつた。「僕はね」と力が言ふ。「僕は非常に感情が強いです、僕の國の者は何方かと言ふと理智が勝て感情に乏しい方だが僕だけは幼さい時に母に別れて異性からの愛を充分に受けた事がない故か、異性に對する愛の要求が絶えず胸に燃えてるんです其れは美しい感情も又た醜惡な方面も同時に起るんです、だからね、篤さん、僕が感情に制せられる様な事があつたら什麼か注意して下さい」

「と仰やるのは什麼な事なの？」と篤子は涼しい眼を向ける。

「什麼な事つて篤さん」と力は篤子の眼を見詰めて顔を染めた。「お互に自重しませうね」

熱情に燃え立つ力の頭は毎時も篤子の涼しい無邪氣な眼に静められ潔められるのであつた。

篤子は此頃今まで感じた事のない淋しいといふ心を感じ初めた。其れは力の歸宅が晚いとか、友達が来て長時間力を占領されて了ふとかの時であつた。或日彼女は此事を力に話した。

「嫉妬家なんだね」と力は笑つた。

「爾でせうか、私御友達でも餘まり長く貴方と話してると腹が立ちますわ、其れが嫉妬といふものなの？」

「まあ爾だ、併し僕に取ては嬉しいさ」

力は又も笑つた、篤子は合點ゆかぬながらも笑つた。

實際篤子の頭は力の他は何物をも容るゝ事は出来なかつた。彼女は獨り庭の若葉を眺めて力の事を考へて居ると我身ほど幸福なものがない様にしみくと感じ

られる、彼女は芝生に満てる日の光と小鳥と木葉と軒に近い青空に對しても感謝の息を吹き送りたくなる。恥かしい事や嬉しい事を思ひ出しては獨り顔を赧めて獨り四邊を見廻す事もあつた。

「貴方と私は什麼なるんでせう」と彼女は力に訊ねた。

「夫婦になるさ」

「夫婦なんて厭な名前だわね」

「厭だつて仕方がない、結婚すれば夫婦なんだから」

「結婚しなくても可いちやないの？此儘で」

「此儘で？爾だ」と力は力を籠めて言た。「全く此儘で可いんです、僕は何だか篤さんと結婚するのと思ふと寧ろ勿體ない様な氣がするよ」

「あら、どうして？」

「勿體ないといふのはね、爾だね何と言はうか、詰り惜しい様な氣がするんだね

純潔が破壊される様な気がするんだね、篤さんは爾思はない？」

「私爾思はないわ、結婚しても純潔で居られるんじゃないの？」

「爾言へば爾だが……」

「私早く結婚したいわ」

「……是れや什麼も猛烈だね」

「あら此那事を言ちや不可い事なの？」と篤子は力の哄笑に一寸まごついた。

「不可い事はないが……まあ篤さんは本當に子供だね」

「貴方だつて子供だよ」

「いや僕は非常に不可い處がある、篤さんに對して恥かしら」

「どんな事？」

「今ま言ても篤さんには解るまい」

力は悄然として言た。

「どうだ、散歩に行かうか」

「えい、伴れて行て下すつて？」

二人は外へ出た。夏の夜は軒並の灯華やかに、裕の人、紺飛白の人、セルの人、衣更時の服装は様々に町を彩る。芋屋は氷屋に代り蒲團屋は簾屋に代り、どの家も障子を明け放して、特に女の素足と羽織なしの姿が夏の夕べの趣を添へた。篤子は力に慫うして一緒に出る事は何より嬉しかった。明るい町を二人は並んで歩いた。別に用事とてあるのではない。二人は時計屋の前に立て硝子越しに品物と正札を覗いたり、活動広告の行燈を背負つて行く爺を見て笑つたり、鐵管修繕のかんてらに照られて働いてる工夫の仕事を見物したりした。

「畜生め」とある横町で職人體の男二三人が擦れ違ひ様に怒鳴た。

「馬鹿にしてやがらあ」

「うまくやつてやがるな」

「よう、やけまあす」と黄色な聲。

二人ははつとして足を急がした。急いた拍子に篤子が一つ躓いた時、「わあッ」といふ諸聲が一度に起つた。

橋を渡つた二人は立止まつた。二人の手と手は確乎と握られてあつた。

「あら大變だわ」と篤子は慌て、手を拂つた。

「何が？」

「手を握りつこなしつて約束ぢやなかつたの？」

「手位は構はないさ……呆れた人だね、篤さんは什麼して其那に子供なんだらう」と力は再び手を差し出した

三

學生の何よりも樂みとする暑中休暇が間近になつた。力は此の夏は北海道へ旅行して卒業論文に取掛らうか、但しは篤さんと別れるのが惜しいから東京に留らうか杯と戯むれて居たが、到頭一先づ岡山のお祖父さんの許へ歸省するといふ事に決した。襦袢や單衣浴衣の二三枚も準備せねばならぬ。人手を頼むよりも自分で裁縫してあげるのは自分の役目である、とは言ふものゝ若し針の跡に拙い處があつて、お祖父さんに蔑まれる様な事はありはしまいか、篤子は學校の試験よりも辛い思をしながらも猶一點の嬉しさは良人の肌に着く仕立物といふ觀念であつた。

身丈袖丈の寸法、截ち方、解らぬ處をお時に聞くと、お前の御亭主の着物の世話まで私は焼ききれないよと言ふ。篤子は一針／＼に心を籠めて縫ひ出した。少

女ながらも彼女は最早十八歳である。我が手に成つた着物が良人の身體に纏はれて世間の人の中を行くのだ。什麼か少しでも着心地の好い様に、人に賞められる様に、憚う思ふ中にも此の着物を着た時の力の殿振は什麼だらうか、紺飛白は似合ふ方だが白飛白は什麼だらうか。彼女は胸を跳らしたり微笑んだりした。其處へ力が遠慮もなくやつて来る。

「やあ出来たね、其の袋の様なものは何だ」

「これは袖よ」

「はあ袖かな、其方の細長い奴は何だ。やあ縫目が荒いな、是は蚤がどしく潜り抜ける様に工夫をしたのだらうね」

「厭よ、今から御覽になつては」

此那風では中々仕事が捗取りさうもない、篤子は到頭忌避を申込んだ。「貴方仕立上るまで此室へ被來やらないで頂戴ね」

「来ては不可いのか」

「えい、一枚の單衣物が今日で三日目ですもの」

「ぢや来ない様にしやう」

「全然被來やらなくても厭よ。」

「ぢや幾時間目位」

「二時間」

「よし二時間、其れぢや其間散歩に出掛けやう」

「何處へ？」

「今日は土曜だから日比谷の音楽堂へ行って来る」

「あら私も行きたいわね」

「不可い、裁縫が仕上らない中は……海軍の軍樂隊だせ、ワグネルのタンホイゼルがあるよ、今日は、實に素敵だね」

「まあ聞きたいわね」

「裁縫があるからつて僕との面會を謝絶した位だから篤さんは行かれまい、氣の毒だな、面白いせ、ペトーウエンの月夜もあるよ、篤さんは音楽が嫌だから可い様なもの、好きな人なら何を扱て置いても行かぬだね、ちや失敬」

「精々羨ましがらせを言て力は室を出た。」

「まあ憎らしい」と篤子は針を取上げて獨り嫣然した。と一分と経たぬ中に力が再び現はれた。

「あら何故被來つたの？」と篤子が咎むる様に言ふ。「音楽堂は何處なすつて？」

「音楽堂へ是から行くんだが本當に篤さんは裁縫の方が可いんですね」

「だつて仕方が無いんですもの」

「ちや左様なら、二時間だね、二時間、左様なら」

あんな事を言て行たが屹度もう一度位は戻つて來るだらうと篤子は針を動かさ

ながら心待に待て居た、けれども廊下の足音も聞えぬ、十分間も経つと彼女は本當に力さんが出て行たのか什麼かを確かめて見たい氣がし出した。彼女は窺かに足音を忍ばして力の室を覗いた、室は空虚であつた。

「本當に行て了つたのだわ」

篤子は力が獨りてくく町を歩いて行く姿を思ひ浮べて氣の毒に思ひながら室へ歸ると椽先に仙七の姿が見えた。

「仙さん力さんを知らなくつて？」

「知て居ます、環さんの御室です」

「えつ環さんの？」

「えい、大村さんの御嬢様が見えて居ましたが環さんが急に癪が起つたとかで力さんが看病なすつてます」

「あら大變だわね、大分苦しきう？」

「何だか知らねえけれども力さんが行たら多分癒るでせう、決まつてらあ」
「恁う言て仙七は頭を掉て植込の方へ去た。」

四

環の癢は珍らしくもない。其度毎に力を呼びに来る。力は毎も其れを厭がつた。處女には所謂癢なんてものは有るべき筈がない。環さんのは食過ぎの胃腸痙攣に過ぎぬ、抛て置けば癒るのだ。恁う言ひくしながらも醫者の心得ある者の義務として看病しない譯にはいかなかつた。

篤子は裁縫の道具を其の儘、環の室を見舞つた。先づ強い香水の匂が鼻を衝く、枕元にお時が坐つて居る。環は友禪縮緬の蒲團に横になつて肩で息をして居る、其の背後から力は確乎と兩手を組ました腹の邊を壓へて居る。

「什麼なすつて？」と篤子は心配さうに近寄た。

「漸々静まつた」と力が言ふ。

「誰あれ？」と環が訊く。同時に篤子の顔が彼女の眼に入た。

「環さん如何？」

「……………」

「お苦しいでせうね」

「……………」

環は黙つて返事もしなかつた。と苦しきうな呻吟が迫り来る呼吸と共に聞え出した。

「あゝ来た！、又来た、あゝ苦しい」

組まされた手を釋かうとする、力は釋かせまいとする、背後に反らうとする、其れを壓へやうとする、烈しい悶が始まつた。

「静として居なくちや不可」と力は苛れたさうに言ふ。けれども環の悶は刻一刻に募つて来た。袖が巻かれて兩腕も肩先も露はに胸の邊から乳根の處まで襟が開かれた。而して身體を轉々する毎に緋羽二重の蹴出しが眞白な脛に齧はり付き

釋れ零れる、燃ゆる様な紅い小着の裏が足の爪先に踏み退けられ推し出さうと、枕は何處へ飛んだやら解らぬ。慙うなつて來ると女の嗜みも何もあつたものでない。力は迷惑さうに抱き締めて居る。流石に女同士とて篤子は裾へ廻つて取亂した環の裾を掻き合はしてやつた。

「彼方へ行て、ノ、ノ」と環は夢中に叫ぶ。

「大丈夫かい」とお時は念を押して。

「篤さん彼方へ行きませう、氣兼ねると不可いから」

「でも誰か添いて居りませんか」

「可いたら可いちやないの？ 力さんが氣になつて一人残しては置けないのかい」

「あら爾那……………」

篤子は弗と耳を染めてお時と共に室を出た。

「まあ什麼して始終あの病氣が起るんでせう癩といふ病氣は恐いものだわねえ」

彼女は漸と裁縫に取掛つた。環さんは什麼に苦しいだらう、あんなに苦しむよりか早く注射でもするが可いのに、力さんはほんの軽い病の様に言てるが、あれでは中々大變だ、第一あんなに悶へた後では癒つても身體の疲勞が一通であるまい。彼女は乳母が折り／＼さしこみの來る時に大きな袋に入れて壁に吊して置く。枯葉の様なものを煎じて飲むのを憶ひ出した、あれがあると可い、何といふ藥だらう」恁那事を思ひつゝも一時間が程は針を動かした。一枚の單衣が漸く出來上がつたのである。

「什麼だらう、おくみが違ひはしまいか、裾が曲りはしまいか」

彼女は疊み上げて道具を片寄せ、廂から下がる髪を指先に拂つて霎時其儘に動きもせず、仕事を終つた満足に我身を任して居た。と又た急に「早く着せて見たい」といふ氣が起つた。

「什麼なすつたらう、もう癒つたかしらん、力さんが此室へ來さうなものだ」

室を掃除し終つても力は來さうにもない。「行て見やうか」と思つた時。

「馬鹿にしてやがらあ」といふ仙七の聲が聞えた。

「どうしたの仙どん」

「どうも恁うも無いや、首つ玉に嚙り付いたり、横腹に抱付いたりしやがつて病氣も癩もあつたもんぢやねえ」

「何を言つてるの？」

「御嬢様！」と仙七は初めて立止つて黒犬の前足を膝の處まで持上げ。

「氣を付けなくつちや不可ませんせ、今に油揚を鳶に攫はれますせ」

「なあに？仙どん」

「自烈體な、お嬢様はあんまり人が善過ぎませあ」

「何を言てるんだか解らないわよ」

「彼處を御覽なさい」と仙七は庭の奥を指さしたまゝ、黒犬を伴れていん／＼去た。

庭の奥は楓と躑躅に夕日が班の明るい線を射し込んで居る。其の植込を洩れて鞞鞞が動く。一上一下、餘り高くはないが動く度にきやつくといふ笑聲が聞えて、二人の姿が見える。

「力さんと環さんだ」

篤子は吃驚して息が塞りさうになつた。

五

一時間前に五體を藻掻いて苦しんで居た人が今ま鞞鞞に乗って快活に笑つて居る。其れさへあるに病氣が療つたら癒つたで何故力さんが一寸位来て知らしてくれないのだらう。篤子は夕暮の色が段々に庭に迫ると共に自分の心も次第に暗くなる心地がし出した。何時の間にか頭の上に電燈が點つて居る。彼女は何を思ふともなく只顔の皮が硬ばる様な心持で默然と坐つてる中に不圖眼が座蒲團の上に移る。メリンスの座蒲團の上にきちんと疊んだ男單衣が先刻の儘に置かれてある。彼女は凝と其れを見詰てる中に思はず肩を慄はした。

「まあ私は什麼したといふんだらう」と彼女は獨り口の中で言た。「私今ま何を考へたんだらう、環さんが力さんと鞞鞞に乗る程快くなれば私は喜ばなければならぬ筈なのに什麼して恚う二人が羨ましくなつたり力さんが恨めしくなつたりし

たんだらう、今まで此那事はなかつたのだが今日に限つて……私の頭は餘程什麼かしてゐるわ」

篤子の胸が段々に明りになると共に矢も楯も堪らなく恥かしい様な氣がした。慙うなつて來ると彼女は霎時も黙としては居られない、彼女は突如室を出て力の書齋に飛込んだ。而して力の姿を見るや否や「御免なさい」と言ひさま椽に坐つた。

「どうしたの？」と力は欄干に腰を掛けて暮れゆく空を眺めて居たが、篤子の慌てた姿を見て聲を掛けた。

「私大變な悪い事をしましたのよ」

「悪い事？篤さんが悪い事をしたなんて其れや珍らしい話ですな、どんな事？」

「私ね……」と言淀んで「私言へないわ」

「言へない事を言ひに來たのか」

「悪かつたから謝罪りませうと思つて來たけれども、もう可いわ、貴方許して下さるわね」

「事情を言はんで許してくれるかと言はれても困るぢやないか」

「だつて變ですもの」

「何が變なの？あゝ着物を縫ひ損なつたんだね」

「いゝえ其那事ぢやないのよ」

「ぢや何です、言はなけりや許さない」

「ぢや言ひますわ……貴方と環さんとのことなんです」

「僕と環さん？」と言ひかけて力は霎時息を凝らしたが欄干を滑り降りて篤子の膝近くに座つた。南向の椽を斜に東からの月光が二人の上半身の輪廓を劃然と見せた。

「僕と環さんと什麼かしたんですか」

「いゝえ、私ね、私貴方と環さんと鞆に乗て居たもんですから私何だか悲しく
なりましたのよ……もう何ともなくなつたけれども、私急に變な氣がしたもんだ
から、什麼な場合にも貴方を恨むなんて其那事は悪い事だと思つたから謝罪に參
りましたのよ、今度からは決して其那氣は起さないからね、御免なさいね、ねえ
力さん」

「解つた」と力は微笑みかけた顔を向けて「貴方は實に潔い、丁度今夜の月の様
だ、僕は何とも貴方に感謝の仕様がな、實際僕は貴方に疑られても辯解の出來
ない人間だから」

「あら私貴方を疑りやしませんわ」

「いや待て下さい、僕は貴方に愛せられる資格が無いかも知れません」

「どうして？」と篤子は狎へる様に心配さうな聲を出した。

「まあ止ませう、兎も角僕は此家を出ます」

「何故出なさるの？」

「僕は弱いなあ」と力は突然歎息したが聽て篤子の手をぎゅつと握りしめた。「篤
さん結婚は何時でしたっけ」

「來年よ」

「來年、爾だ、來年、其れまで什麼か僕の側を離れない様にして下さい、僕は貴
方より他には什麼な女でも僕の側に近付けない、僕は女が恐い、あゝ僕は什
麼して慙う弱いんだらう、僕は此家を出ます」

「出ると毎日會へなくなるわね」

「あゝ爾だ、困つたなあ、併し……」

と言淀んで彼は頭を撈つて欄干に凭れた。「僕は實に弱い」

「今日は什麼かして被居やるのね」
力は答へなかつた。

「力様く」とお勝の呼ぶ聲がする。

「力様お嬢様が大變でございます」

「又た癪か」と力は大聲に怒鳴た。

「早く被居つて下さいまし」

「用があるから行かれないと言つてくれ」

「行てあげて頂戴よ、すつかり癒らない中に輕舉をなさるもんだから又た起つた

のよ屹度」

「僕は行かない」

「あら私あんな事を言たからぢやないの？御免なさいね」

「抛て置くと癒るんだ」

「あら伯母さんが来るわ、早くく」

篤子は言捨て、室を出た。力は欄干に背を凭らしたまゝ黙つて居たが聽て立上

がつて廊下へ出た。右へ降りると環の室、左へ降りると篤子の室。下からお時の
呼ぶ聲が頻りに聞ゆる。

力は一寸舌打をして静に右の階段を降りた。

環の室へ行た力は三十分と経たぬ中に書齋へ歸つた。彼は霎時欄干に凭れて見るともなく月を眺めて居た。月は南へ廻つて正面に軒の影を疊へ落した。此夜は天が晴れても室内は蒸す様に暑い。庭の木々は只だ月光に輝いて見えるだけで少しの風もない。

力は死せる者の如く動かなかつた彼は今環の事を考へて居るのである。先刻程環の室へ行た時環は病氣でも何でもなかつた、傍にお時も居ない、而して彼女は泣いて居た。彼女は力が何か言ひ出すだらうと豫期するものゝ如くであつたが、力は到頭終りまで何も言はなかつた。彼女も言はなかつた。最後に彼女は慙う言た。

「何故被來つたの？」

「病氣が起つたと伯母さんが言つたから」

「彼方へ行って下さい、もう可いわ〜」

力はふいと室を出た、出しなに彼は環が兩手を顔に當て、泣いてる姿を見た。

「實に變挺だ」

力は今更其れから頃日の事柄を想ひ續けた。彼女は折り〜涙を零してしみじみ語る、私は父親のない身體だ、兄さんは道樂者で信賴にならず御祖父さんは孫を孫とも想つてくれない、私ほど不幸に生れたものは世の中にあるまい。慙ういふ話をする中にも吐息と歎歎而して如何にも世を果敢なむ様な感傷的な語調は力の眼にも厭らしく見えた。けれども更其れが幾度も繰返されると共に力は段々憎惡の念が薄らいだ。「品性は下劣ではあるが其れは教育が悪かつたからだ、寧ろ同情すべき點が幾何もある」慙ういふ心になつた。

加之ならず力の若い血を間がな跳らすものは環の先天的の妖艶かさであ

つた。彼女は物を言ふ時には必らず顔を斜めにして口を心持歪めながら凝と目を見詰めるのが癖であつた、二人で居る時は折り／＼肩に凭れて故意と後髪を力の顔に觸れさせ耳に熱い息を吹きかけて笑ふ事もある、爾かと思ふと急に壓はれた様に人目も構はず手を握つて二三度振つて直ぐに突放してけり、りとしてる事もある。篤子の事を言ひ出しては擲擲ひながら篤子の前で手先で接吻を送る眞似をする事もある。其の上の時々の持病？力が胸を抱へ手足を抑へ確乎と抱き締めつする時、男の心を唆かす様な彼女の素振が流石に力の頭を亂させた。

「馬鹿な事だ、詰らない」

力は我れと我が身の卑しい慾望を叱つた。此儘に過ぎなば自分は彼女の尻に掛るだらう、篤子の様な人形的な女が嫌になつて卑しい刺戟的な女を好く様になるだらう。

「俺は何といふ淺間しいんだらう」

彼は環の室へは二度と足を踏入れまいと決心した、けれどもお時の呼聲、環の持病——縦令其れは虚病であると知りつゝも、彼の足は自然と其方に向く。

「俺は醫者になるんだ、患者に接近する事は決して疚しい事でない」

彼は環を患者扱に見做した。けれども彼の心は其を認めなかつた。

「俺は俺を欺いた」と彼は身慄した。

月の前を過ぎ行く雲は種々な形になつて消え行く。力は幾時間同じ事を考へたか知らなかつた。彼の頭は熱し彼の身體は疲れた。其の間艶めいた環の素振が絶えず彼の眼先にちらついた。

「馬鹿ツ／＼」

彼は漸と身體を起した。廊下へ出ると家の中が静である。彼は右か左かと考へる間もなく彼の足は自然と左に向いた。階段を降りて又もや左へ曲ると其處は篤子の室である。室の書院窓は明け放されて晃々とした電燈の下に篤子が犖然と坐

つて力の次の單衣を縫つて居る。力は足を停めて手水鉢越しに其の方を見詰めた。美しい指先が滑らかに針と共に動く。頬は少し紅みを帯びて、睫の長い黒い眼は涼しく自分の手元に從つて動く。何を思つたか篤子は嫣然笑つた、而して霎時手を休めて耳を敬てたが又嫣然笑つて針を運ばした。

「あれがくく」と力は弗として口の中で言た。「あれが本當の俺の妻だ」
此時彼の兩腋は汗に濡れた。彼は盜賊の如く足を忍ばして再び書齋へ戻つた。
此夜珍らしく力は熟睡した。

七

暑中休暇になつた。力は逃げる様に岡山の郷里を指して出發した。

「一週間も経つと歸つて来るから待て、下さいね」彼は憊う言て別れ際の手を握つた。

「えい、待て居ますわ、けれども何だつて其那に大急ぎで御國へ被行やるの」と篤子は訊ねた。

「此家に居るのは苦しいからです」
篤子には其意味が解らなかつた。

「何が苦しいんだらう」彼女は幾度も疑問を解かうとしたが及ばなかつた。

岡山の田舎から力の手紙が來た。手紙には曾て篤子が力の口から聞いた事もない様な熱烈な愛の文字が萬弩の如く降り注がれてあつた。自分は何れだけ貴方を

愛して居るかといふ事は東京を去た其の夜から……汽車の中から幾度も引返した
いと思たので初めて解つた、毎日會つて居ては左程でもないが……半日會はぬと
……而して當分會はれぬのだと思ふと、もう氣が狂はしい程會ひたくなる。僕が
恁程に思ふ様に屹度貴方も爾思つて居たらうと思ふと更らに戀しくなる。大江丸
といふ故人の俳句に鶯鴛よ一夜別れて戀を知れといふのがある、僕は汽車に乗て
初めて戀を知つた、僕が矢の如くに東京を飛び出したのも詰りは僕が如何に貴方
を愛して居るかといふ事を證明した様なものだ、僕と貴方は何時までも純潔で居た
い、來年の結婚を飾る花環は二人の無垢な身體にあるのだと思つて居る、此潔い
朝を迎へたい爲に僕は何れだけ苦しんだか知れない、僕の卑しい慾望は時々刻々
に僕に迫ると共に強烈な誘惑が僕の血と肉を日夜毎に刺戟する。僕が逃げて來
たのは此爲である、僕は今此に暫らく孤獨となつて靜かに攪亂された頭を淨めた
い、而して只だ貴方の潔い名を繰返して心耳を澄ましたい。僕は自分の卑しい根

性を祖父に打明けた、祖父は耳を傾けて聞いてくれた、而して終りに恁う言た「貴
様は篤子に惚れ様が足りないのだ」果して僕が貴方を愛する事が深くないのであ
らうか、精神の愛と肉の慾とは必らず一致するものであらうか、僕は祖父の言が
餘りに單純過ぎると思ふ。けれども僕は斷言する、僕は貴方を愛する、僕は貴方
を愛する、あ、僕は百萬返これを繰返したい。繰返して居る中に僕は凡ての事を忘
れて只だ貴方の傍ばかりがはつきりと僕の頭に刻まれて來る。
恁ういふ風の手紙が毎日來た、篤子は晝の中に一二度読み返して夜になると寢
床の中で又た讀んだ。讀みゆく中に理由もなく胸が轟ろいて顔が熱り出す。と嬉
しい涙が止度もなく和らかに流れて來る。
「私は此那立派な文章は書けないわ」
彼は毎も其れを口惜しく思つた、心に思ふまゝを書きさへすれば可いと思ふも
のゝ扱て筆を取ると何を書いて可いのか解らない。

一週間は過ぎた、けれども力は歸らない、或日憊ういふ手紙が来た。

「急いで歸らうと思つたら祖父が憊う言ふ、貴様は未だく惚れ様が足らんからもつと篤子に惚れる様になつてから歸れ。何と言ても承知しないから今五六日滞在する、其代りに僕は一日毎に瘦る様な氣がする」

力が居なくなつてから南一家は急に淋しくなつた。環は持病を起さない代りに毎日出歩いた。琢磨は殆んど家には寄り付かない、而して再び近代劇の稽古に取掛つた、其れは富喜子が女優になるといふ決心をしたからであつた。富喜子の父の大村博士は厳しく叱りつけた、女優にさしてくれば死で了ふと富喜子が騒ぎ出す、家出をして二三日も歸らぬ、華嚴の瀧へ行くと言ふ書置を残して琢磨等の稽古所に寝泊りした事もあつた。其れでも父は聴かなかつた。

「其那奴は死ぬが可い、死にきれなかつたら俺が殺してやる」

母は驚いて富喜子を親戚に預けた、其れは却つて富喜子の願ふ處であつた。「新

らしい女優富士野雪子」といふ前觸が新聞に出初めると共に琢磨との艶聞が早くも傳はつた。「因襲的道德に囚はれたる頑冥なる親の迫害をも事とせず藝術の爲に奮ひ起てる富士野雪子」など、書き立てた文學雜誌もあつた。

「私も爲らうか知ら」と環が言た。

「女優だけは止めてくれ、私に考へがあるから」

憊う言てお時は許さない、環は毎日ぶら／＼不平を並べ立てたが或日お時に憊う言た。

「何處か避暑に行きたいわ」

「其れが可いよ」

「何處が可いでせう」

「須磨か舞子が可いよ」

「其那に遠くへ？」

「爾よ、力さんの歸り路ぢやないか」
環は嫣然して母の顔を見上げた。

八

力 お時、環が留守になつたので家の中は急に淋しくなつた。整然と片付けられた室々は朝夕に掃除の時に出入する丈で徒らに涼しい風が吹通して居る。篤子は日課を決めて種々な温習を初めた。お時が命じて行た冬物の解き物も大方に終つた。手を動かして居る時は紛れて居るが、今まで知らなかつた一種の空想が限りもなく彼女を襲ふた。此の空想には毫も暗い影もない、彼女は丁度春の暖かい風に頬を吹かれながら何が嬉しいといふ事なしに田圃を歩く様な氣がして居る。美しい屋氣樓の様な幻象がまぎ／＼と彼女の眼に映る、力に會ひたいと思ふ時は悲しくなるが其の悲哀は何處かに希望と光を包んである悲哀であつた。

時折總五郎がやつて来る。彼は篤子が淋しいとも言はずに神妙に裁縫をしてゐるのを見ると堪らなく可愛さうになつて来る。何とかして慰さめてやりたいもの

だといふ風に額に手を當て何か滑稽な警句を考へたり、篤子の好きさうな罪のな
い話を仕向けたりした、けれども一時間と腰を落着けてる事はなかつた。篤子の
傍に居ると何だか楽しいが、其れと同時に極めて窮屈である。藝者の噂も出来ず芝
居も好きでなし左りとて總五郎には他に話の材料もない。彼は例の如くちよいち
よい夜泊りをする、而して晝過にこそくと歸つて来て先づ女中共に訊く。「篤子
は何をしてるかね」

先づ様子を探つた上で扱て澄ました顔をして篤子の室へ出張に及ぶ。昨夜は
店の方へ宿つた、交際で鎌倉へ行た、箱根も近頃は毎年の洪水に懲りて御客が少
なくなつたなど、問ひもせぬ辯解を陳べて、自分だけが安心して出て行く。
或日力から手紙が来た。封筒を見ると須磨松濤館にて福永力とある。篤子は急
いで封を切た。文面は例に依て熱烈な愛情に富んだものであつた、而して終りに
慇懃書いてあつた。

「環さんから電報で伯母さんが病氣だから来てくれとの事であつたから来て見る
と伯母さんは大した病氣でなかつた、直ぐ歸らうと思つたら環さんが例の癪を起
したので見棄て歸る事も出来ず、伯母さんが一人では心細いから環の身體が落着
くまで二三日滞在してくれといふので、癒り次第歸京するから待て、下さい。慇
ういふ事になるのも天が僕の心を試練してくれる攝理かも知れない、僕は慇懃思
つて非常に心強くなつた：：」

篤子からも環の見舞状と共に力へ返書を出した。四五日経つと同じ様に熱烈な
手紙が来た。環は極端な神経衰弱になつたらしい。
其れから又四五日、今度の手紙は何日歸るといふ事もなし只豊麗な愛の言葉に
充ちて居た。
手紙は段々短くなつた、終りには十日に一度位となつた、兎角の中に一と月は
経た、或日お時から慇懃いふ葉書が来た。

「力は腸室扶斯に罹つて入院させた、手紙や何かを見せてはならぬと醫者からの注意だから其積で居て貰ひたい、病勢は大した事が無いさうだ」

篤子は思はず總五郎の室へ駆け付けた。

「什麼したら可いでせう」

「うむ」と總五郎は腕を拱んで凝と篤子の顔を見詰め。「何の腸室扶斯だか知れたもんでねえ」

「どうして？」

「力が須磨へなんか行くもんだから此那悪い病氣に取憑かれたんだ」

「私看病に參りますわ」

「行くも可いがね、此奴お考えもんだせ」

「どうして？」

「お時の策略だよ屹度」

「策略つてなに？」

「力に環を野合けやがったんだ」

「其那〜其那事は……」と篤子は顔を耳根まで染めて反抗的に叫んだ。「其那事はありませんわ」

「いや確に爾だ」

「御祖父さん、力さんに限つて其那事はありやしません、環さんだつて其那方ではありません」

「お前は爾思ふかね」

「爾ですとも、無論爾ですわ」

「本當に爾思ふか」

「えい」

「成程」と總五郎は急に首を低れ、額に手をやつた。「其れが可い、俺の邪推だつ

たから氣を悪くしてくれるな、兎も角電報を打て見やう」

電報の返事は憊うであつた。

「傳染病だから篤子が來ても看病が出來ぬ、此方から知らすまで待て」

總五郎は電報と許嫁の良人の身體に心を痛めてる篤子の顔とを見比べて何にも言はなかつた。

「死にやしないでせうか。大丈夫でせうか」と篤子は涙を充滿に湛めて身を悶へた。

九

愛する人の病氣を聞きながら見舞にも行けず、篤子は日毎毎に胸を痛めた。半まで心に迷信を嘲けつて居たが憊うなると神佛に頼るより他はない。彼女は凡ゆる観音様や不動様金比羅様稻荷様の類まで願參りをした。彼女の顔は段々に瘡せて來た。而して幾度となく門に出て郵便屋の姿を見ると力からの音信ではあるまいかと胸を轟ろかした。

此の有様を見て總五郎は第一番に心配した、彼は篤子に言ひ聞かしたい事がある、けれども其れを言たら什麼なに苦しむだらう、此の思の爲めに何にも言ふ事が出來なかつた。頃日彼の商賣は素破らしい景氣で、株屋仲間の羨望は彼の一身に集まつた。此の分で行くと一と月と經たない中に三百萬圓の財産が殖えるだらう、其餘波は仙七にも及んだ。先づ仙七に時計が出來る、結城の着物が出來る

素敵な献上の帯が出来る。三枚裏の雪駄が出来る。而して一寸くは麥酒臭い嘔
を吐いて脚へ楊枝で夜の町を歩いてる時もある。

「今一と息だ、ねえ篤子、御祖父さんが運が好いんぢやない、お前が運が好いん
だ、俺はお前に五百萬圓の財産を作りあげてやるよ、慥うなつたのもお前のお蔭
だからな」

一と月前までは總五郎の爲す事爲る事凡て齟齬だらけで南屋は今に賣物に出る
だらうと評判された、總五郎がお時にお金を借りたのも此爲めであつた。處がお
時が旅に出てから總五郎の運が一足飛に開けた。彼は日頃お時に窘められた金の
恨を此に晴らさうと勇み立た、「儲けた金は不殘篤子にやつてお時をあつと言はし
てやらう」彼は毎も其時のお時の顔を想像して見て微笑んだ。

微笑の中の一瞬の愁眉は篤子の日増に瘦せ行く事である。彼は毎日店からの歸
途に白牡丹や玉屋へ立寄て價に構はず時計指環頭の道具などを買て篤子に與へた

而して篤子の喜ぶ顔を見てはくく相好を崩して笑つた。三越の馬車が毎日の礎
に見える。一つく自分の見立を矜るのが彼の癖である。

他所行の着物としては紋羽二重の紋付より他に持たなかつた篤子は御祖父さんの
賜物を見て夢のやうに驚いた。是れは皆な私の所有になるのか知ら、慥う思ふと
流石に胸が波立たしくなる。

けれども其れは其である。力の病氣に對する心配は決して寶玉や美服と差引に
はならなかつた。總五郎も慰むべき手段が盡きた。

頃日は乳母の許へ行かない様だが行て見るが可いと或日土産ものに金子を添
へて篤子に持たしてやつた。是は何よりの藥であつた、篤子はいそくとして家
を出たが其夜殊の外元氣で歸つた。

「私毎日行きたいわ」

「構はないから毎日行くが可い」

其れでも二日や三日隔位い乳母を訊ねた。お濱の眼は段々快方に向つた、片眼だけは篤子の顔が臃ながらに見える様になつた。彼女は篤子から力と婚約の一件を聞いた時、聲を出して泣いた。

「もう私死んでも可い」恚う言たものゝ二三日経つと。「せめて御祝言の時まで生きて居たうございます」

篤子が訪ねて行く毎にお濱の言ふ言は婚禮の時の事だけであつた。

「又た始まつた」と文太郎が笑ふ。

「だつてお前はお目出度いと思はないか」

「其れや目出度いさ」文太郎の聲は毎も曇つて居た。彼は其語を持出される事を好まなかつた。或日彼は恚う言た。

「お嬢さんはお嫁になるんですね」

「えい」

「爾かな、爾するともう昔のお嬢さんでなくなるんですね」

「當然ぢやないか、奥様におなりなさるんだから」とお濱が言ふ。

「人間てえものは不思議なもんだ、大人になると離れ〜になつて了ふからなあ」

「文ちゃんは何を言てるの？私お嫁に行ても仍且文ちゃんとは離れないわ」

「離れないと言つて貴方は他人の妻になるんでせう」

「馬鹿だねお前は、夫婦てものは他人同士が縁組するのに決まつてるぢやないか
兄妹で夫婦になるものはありやしないよ」

お濱は笑つた、篤子も笑つた。文太郎はにこりともせず。「併し兄弟なら兄弟といふ縁が死ぬまで絶れやしない」

「文ちゃんと私とは兄妹ぢやないの？」

「兄妹？」と文太郎は繰返した。「其れや爾だけれども併し……」

彼は例の哲學者然と頭を傾げて俯目に黙考に沈んだ。恚那話しをしてる中にも

篤子の心は何となく落着かなかつた。來てから一時間も経つともう歸り支度に取掛る。

「まだ宜しいちやありませんか」

「だつて何だか氣がゝりですから」

「何が？」

「力さんから手紙が來てるかも知れないから」

「變つたなあ」と文太郎は獨語の様に唸つた。

焦れ死もせず篤子は待て居た。一週間の別れと思つたのが五週六週暑い盛が過ぎて都の町を往來ふ人の白地の單衣に秋風が眼に立つ頃漸く力の全快の葉書が來た。

「不日歸京の上にてゆるく御話可申候」

篤子は何となく物足りなかつた、幾十日待ち焦れて居た音信は餘りに簡短に過ぎた。縦令筆の先の形容にしろもつと長いく従前通りの熱烈燃ゆる様な感情に富んだ言葉が聞きたかつたのである。

「けれども」と彼女は考へた、病後で精しい手紙は書けないのであらう、實際手紙を読むよりも一日も早く顔と顔を合はして優しい言葉を口づから聞く方が遙かに嬉しい、力さんも大方其の爲めに手紙は簡單に済ましたのだらう。

種々な想像を加へて篤子は此二行の報告的文句を繰返し〜讀んだ。御病氣が快くなつたので何より安心だ、一日も早く御目に掛りたいけれども病後は大切だから輕擧をなさらない様にと細かい返事を認めて送つた。而して心の中には今日か明日かと待て居た。二三日は過ぎた。力から何の消息もない。

「汽車に御乗りになる事が出来ない程未だ疲れて被居やるなら私がお迎旁々其方へ參りませうか」

恚の返事が來ない中に南家に一椿事が出來した。其れは琢磨と富喜子の駈落であつた。二人の艶聞が隠れもなくなつた矢先へ、不節制な遊蕩兒の團結として富喜子は更に一座の座員と怪しき浮名が立てられた、琢磨と座員と醜い鬭争が起つた藝術々と藝術を眞向に振翳して居た若い人達はたつた一人の女を見て脆くも現實の悲哀に觸れた、彼等は渴るた蝶や蜂の様に富喜子の強い肉の香に咽んだ、藝術以外の嫉妬が互に眼に燃え立た、同時に富喜子の傲慢が一座を壓倒した。アン

トニーの琢磨はクレオパトラの柔かな腕に籠絡せられた。不安と嫉妬！琢磨は到頭富喜子を提げて九州へ脱走した。

「脚本家兼俳優と女優の美しき戀よ、彼等の充實したる生活こそ眞の藝術其ものなりと言ふべけれ」と某評論家が下宿屋の一閑張の上に筆を走らした。

二人の藝術家は、親の眼を窃んで手の及ぶ限りの金品を攫つて逃げた。お時の留守として女中までが滅多にお時の室へ立入らなかつた。或朝掃除に入つたお勝は聲を擧げて總五郎の室へ駈け込んだ。

「御用筆筒の錠が振り断れて居ます」

總五郎が行て見ると衣裳筆筒も開けられてある。お時が自慢の新式金庫の扉も難なく開いた。苟しくも金目になるものは一つも餘さず浚ひ込んだらしい。

騒ぎの最中に一封の郵書が舞込んだ。「僕は事情あつて母の財産を少しばかり借用します。泥棒ではない借用だから怒らない様に母を宥めて下さい。無論藝術の

爲めには小道徳を無視しなければならん場合がありますからね。……お祖父さん
琢磨生」

「此奴お洒落てるわい」と總五郎は額を叩いた。「巧えもんだ、泥棒ぢやない借用
だつてハツ／＼ハツ、お時の奴どんな顔をするだらう」

此報道に接してお時と環は直ぐに歸京した。金庫の中には篤子から預かつた五
萬圓の公債が入つてある。其れも失くなつた。

「什麼して金庫を開けたのだらう」

とお時が首を傾げた。

「金庫屋を召んで開けさせたさうだよ、何しろ借用だからね」と總五郎は心地好
く笑つて。

「篤子の五萬圓だけは返して貰ひたいね」

「えい、何れ返しますよ、何しろ借用ですからね」

「ふうむ、成程、借用か、ほう、ふうむ」

總五郎は言句が詰まつて額ばかりを叩いて居たが環に向つて。「どうだ、お前も
ちよい／＼借用しては」

「何を？」

「爾だな、篤子から力さんを借用しては什麼だ、無論御念には及ばねえだらう
か」

「お祖父さんは何といふ品性が卑しいんでせう」と環は唇を反らした。

琢磨の駢落！金品の消失！お時が悄氣返れば其れだけ總五郎は皮肉な笑を浴びせた。「什麼だ！少しは懲りたかね」

何と言はれても仕方が無い、お時は切齒をしながら口惜さを怵へた、搗て、加へて頃は總五郎の景氣が素晴らしいものである、二月月の留守の間に百萬圓の財産が殖えた、毎日の様に金銀寶玉の類を取寄せてほんの子供に玩具でも買つてやる様に篤子の用筆筒に捲り込んでやる。

「環！御前も欲しければ買つてやらう」

「要らないわ」

「爾々お前には此那ものが要らない筈だ、賸物の方が好きなんだからな」
 恚ういふ争ひは絶えなかつた。

「今に御覽なさいよ、吃驚しない様にね」

お時は額に筋を寄せながら鼻先で笑つた。

「うむ、お前も今に吃驚しない様にするが可い、三百萬圓になつたら不殘篤子に與るんだ」

一週間も経つて力が上京するといふ報知が來た。篤子は朝から胸に波を打たして時計ばかりを睇めて居た。幾度鏡に向つたか數へきれない、髪や身装などは滅多に氣にした事は無いのだが此の日に限つて不思議に其れが氣になつた、御祖父さんに戴だいた指環や時計、櫛、襟留、何れを用ひし好いか其の選擇にも困つた。

「什麼なお顔をして被居やるだらう、病後でお瘦せなすつたか知ら、私を見て第一番に何と仰しやるだらう、仍且毎もの通り大きな聲でおい君！と怒鳴るかしたら、どの單衣を着て被居やるだらう、汗臭くなつて居ないかしら、あの方に何か言は

れたら私屹度顔が紅くなるわ、其の時に他の人が何と思ふだらう」

篤子は獨りで種々な空想に笑つたり眉を擧めたりした。

時刻となつた。

「環さん、お前支度をしないの？」とお時が言ふ。

「私行かないわ」

「何故？」

「私には篤子さんの様な立派な着物や指環が無いんですもの」

半响ばかり環とお時は争論をして到頭環は行かない事に決まつた。

篤子は獨り新橋へ行た。汽車を降りた力の態度に別段變つた事もなかつた。病後の故か少しは面寝れがして顔色も蒼みを帯びてる様だが、其れにしても元氣は少しも衰へなかつた。篤子は力の洋傘と毛布とを持つた、力は小さな行季を提げた。

「車に乗て？」

「いや歩いて行かう、話しながら」

二人は肩を擦れくりに築地へ路を取た。折りく篤子は横合から力の顔を覗いて元氣の好い話聲に聞惚れた。力も篤子の涼しい眼をちよいく儼み見て吻と安心と共に熱い息を吐いた。

「私本當に心配しましたわ、貴方の御病氣の事を聞いた時に」

「爾でせう、僕は其れよりも實際君に會ひたくつて堪らなかつた、僕の手紙を讀んで呉れた？」

「えい、何遍も……」

「何遍も？難有う、して君は怒つた？」

「怒りやしませんわ、私だつて手紙を上げたぢやないの？」

「あれは本當なの？本當に彼那に僕を思ふてくれるの？」